

中学校における心に響く道徳の時間の展開

- 職場体験と結びついた道徳の時間の学習プログラム -

中学校における「心に響く道徳の時間」を実現するために、昨年度から生徒自らの体験を生かした道徳の時間の研究を進めてきた。

本年度は、それを踏まえ、道徳的実践力の育成を「人間としての生き方」という面からより深めるために、体験の中でもとりわけ「生き方」の視点が明確に表れている『生き方探究・チャレンジ体験』に注目した。職場体験と道徳の時間を道徳的価値の視点で連動させることで、道徳的実践力を育成する学習プログラムを提示し、実証授業を通してその有効性を明らかにする。

目 次

はじめに……………	1	第3章 道徳の時間の実際	
第1章 職場体験と結びついた 道徳の時間のめざすもの		第1節 ユニット「勤労」	
第1節 「心に響く道徳の時間」に向けて		(1) 授業の実際……………	16
(1) 心に響く道徳の時間に するための視点……………	1	(2) 分析と考察……………	18
(2) 心に響く道徳の時間を通して 培われる力……………	3	第2節 ユニット「思いやり・感謝」	
第2節 職場体験を通して学びとる道徳的価値		(1) 授業の実際……………	22
(1) 職場体験と道徳の時間を 結びつける意義……………	4	(2) 分析と考察……………	23
(2) 道徳的価値の視点による 職場体験の分析……………	5	第4章 学習プログラムの有効性	
第2章 学習プログラムの開発と展開		第1節 実証授業を通して明らかになったこと	
第1節 学習プログラムの開発に向けて		(1) 生徒の姿から見る 学習プログラムの有効性……………	26
(1) 学習プログラムの 開発における留意点……………	8	(2) 自己点検カードから見る 学習プログラムの有効性……………	27
(2) 自己点検カードについて……………	10	第2節 心に響く道徳の時間のあり方……………	31
第2節 学習プログラムの展開		おわりに……………	32
(1) ユニットの構成とそのねらい……………	11		
(2) 五つのユニットの学習プログラム……………	14		

<研究担当> 石居 知 予 子 (京都市立永松記念教育センター研究課研究員)

<研究指導> 外 川 正 明 (京都市立永松記念教育センター研究課指導主事)

<研究協力校> 京都市立藤森中学校

<研究協力員> 沢 田 嘉 子 (京都市立藤森中学校教諭)

はじめに

道徳教育の充実が求められる中、昭和33年学習指導要領の改訂によって、道徳の時間が教育課程に位置付けられた。とりわけ、昨今の子どもたちの社会生活における規範意識の低下や問題行動の多様化・複雑化を受けて、社会問題として道徳教育への関心が高まっており、その中でも道徳の時間のあり方が注目されている。

しかし、もちろん道徳の時間は子どもたちの規範意識を高めることや、問題行動の抑制のために存在するものではない。子どもたちは、常によりよく生きたいと願っている。その願いをかなえるために「人としてどう生きていくべきか」という問いかけに自らが立ち向かっていく力をつけるためである。道徳の時間はその力、つまり道徳的実践力の育成に向けてのかなめの時間なのである。

昨年度と本年度を通し、この力の育成を図るために、心に響く道徳の時間の充実をめざして研究を進めてきた。生徒が、たてまえとして道徳の時間を捉える限りは、道徳の時間が生徒の心に響かないことは明らかである。生徒が道徳的価値を自分のこととして内面で自覚し、それを日常生活との関わりの中で捉えたとき、心に響く時間となるのである。

そこで、生徒の体験と道徳の時間を結びつけて展開することによって、道徳の時間が心に響き、そこで学習した価値を生徒が自分のこととして受け止めることで道徳的実践力の育成が図られるのではないかと考えたのである。

本研究では、以上の点を踏まえて、第1章で昨年度の研究成果と課題、及びそれを解決するための新たな視点を述べる。そして第2章では、それを踏まえて開発した学習プログラムを提示し、さらに、第3章、第4章で、本研究の学習プログラムの実証授業の分析考察を通し、その有効性を検証し研究のまとめとする。

第1章 職場体験と結びついた

道徳の時間のめざすもの

第1節 「心に響く道徳の時間」に向けて

(1) 心に響く道徳の時間にするための視点

「生きる力」の核となる豊かな人間性を育むことにおいて、道徳教育やそのかなめである道徳の

時間が担っている役割は大きい。

「生きる力」が注目されたのは、平成8年7月の中央教育審議会第一次答申においてであるが、それを受けた中学校学習指導要領解説 道徳編では、「生きる力」とは、「変化の激しい社会において、いかなる場面でも他人と協調しつつ自律的に社会生活を送れるようになるために必要な、人間としての実践的な力であり、豊かな人間性を重要な要素とする」(1)とある。また、このような「生きる力」を育てるのが、心の教育であり、道徳教育なのであるとも述べられている。(2)

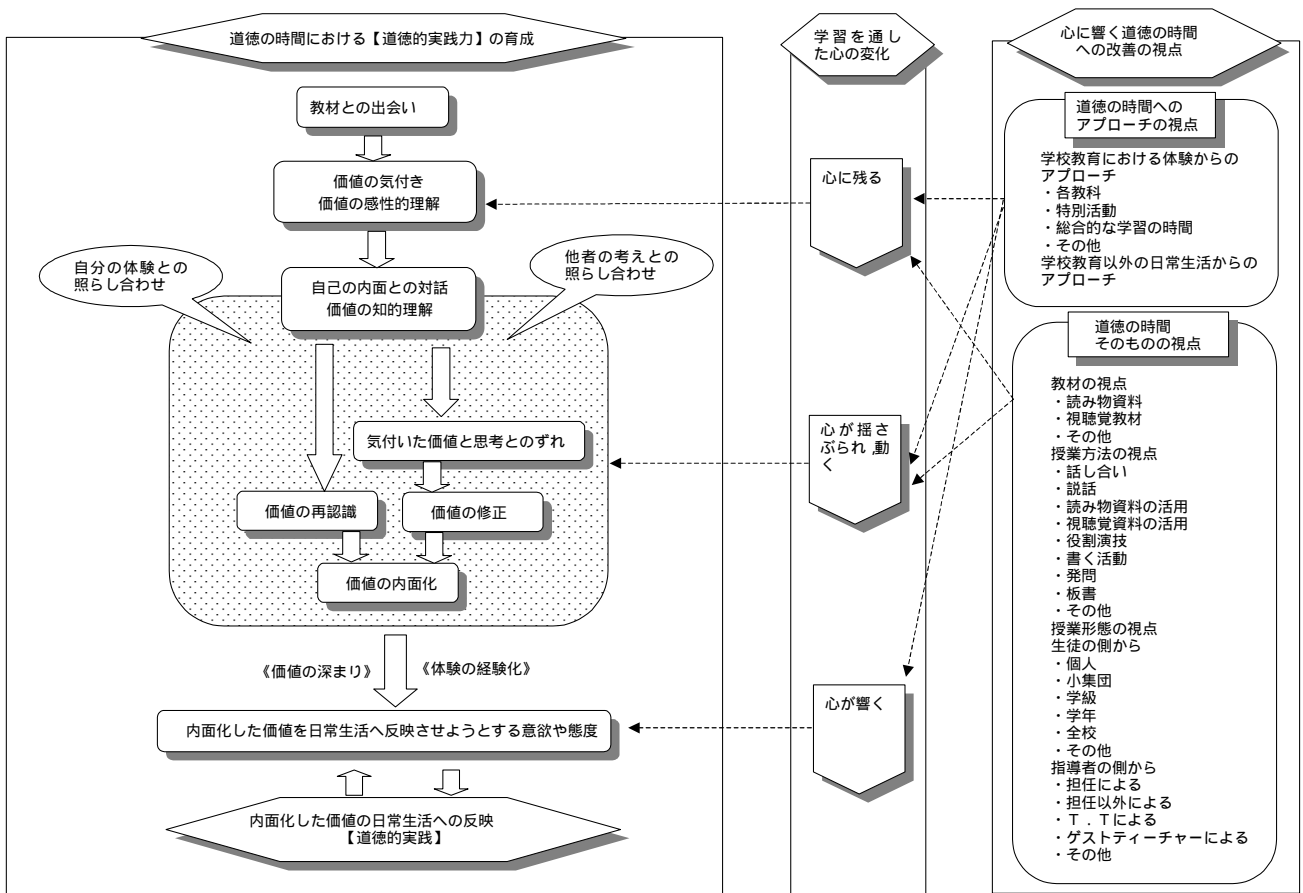
道徳教育でこのような力を育成するためには、かなめとなる道徳の時間の充実が図られなければならない。つまり、道徳的価値を基盤とするよりよく生きる力を育成する充実した時間となることが不可欠なのである。

では、具体的に充実した道徳の時間とはどのような時間をさすのであろうか。生徒は単に「楽しい」授業を充実した時間と短絡的に捉える場合がある。たとえば、指導者が生徒を授業に集中させるために彼らの興味や関心を引き出す話題を提供する場合がある。この話題を生徒が「楽しい」と感じ、その授業は「楽しかった」と捉えることがある。しかし、もちろん学習における「楽しい」とは、そのような意味ではない。この場合、生徒が「楽しい」と感じて、それは単に学習への契機にすぎず、生徒にとって充実した学習になるかどうかは、別の問題であるからである。

大津悦夫は授業における楽しさについて、二つの側面から次のように述べている。「第一の側面は、子どもの知的好奇心に基づく楽しさである。あることに熱中できる、あきないで取り組める、などがこれにあたる。第二の側面は、子どもが自分の知的世界の拡大を実感したことから生ずる楽しさである。楽しいことを知った場合、今まで解けなかった問題がとけるようになった場合、自分の意見を持てた場合などがこれにあたる。」(3)

つまり、学習において「楽しい」とは、その内容に興味、関心をもって取り組むことによって、今まで疑問に思っていたことやわからなかったことがわかるようになり、その理解したことをこれからの生き方に生かしていける力がつくことをさすと思われる。これを道徳の時間にあてはめて考えると、道徳の時間の場合の「楽しい」とは、自己の内面との対話を通して新たな価値に気付いたり、今までの自分の価値観が他者の考えによって揺さぶられたりしながら、価値を内面化させ、それを自分のこれからの生き方に生かしていける力

図 1 - 1 心に響く道徳の時間の構造



がつくことである。このような、道徳の時間が充実した時間なのである。

そこで、昨年度の研究では、充実した道徳の時間を「心に響く道徳の時間」と捉え、その構造を提示した。(4)本年度は、これを道徳の時間における「道徳的实践力の育成」、「心の变化」、「改善の視点」という三つの点から再考し、お互いの関連を踏まえてその構造を図1-1のように整理した。

以下、図1-1を参照しながら「心に響く道徳の時間」の構造について説明することにする。

まず、「心の变化」と「道徳的实践力の育成」との関連についてであるが、昨年度の研究では道徳の時間が「心が響く」ことを、学習を通じた心の変化から「心に残る」「心が揺さぶられ、動く」「心が響く」という三段階で捉えた。(5)心が響くためにはまず、教材との出会いを通して価値に気付き、価値が「心に残る」ことがその出発点となる。この段階では、既存の概念で価値を捉えるのではなく、今の自分がその価値をどのように自覚しているのかを感性で受け止めることが大切である。そうすることによって、次の段階の自己の内面との対話に広がりや深まりが生じるからである。

つまり、価値を感性で捉えて理解することを感性的理解、思考を促すことで理解することを知的理解とするならば、「心に残る」段階は、教材との出会いの中でそこに含まれる価値を感性で受け止める、感性的理解を促す段階と考えることができる。

そして、心に残った価値を自分の体験や、他の人の価値についての考え方と照らし合わせながら自己の内面との対話を行う段階が「心が揺さぶられ、動く」である。

自己の内面との対話では、気付いた価値によりそれまで漠然としていた価値についての認識が明確になったり、価値を再認識したりする。また、気付いた価値と自分の考え方との間にずれがある場合には、内面と葛藤しながら価値観を修正しようとする。滝沢武久は「思考によって処理しきれないことがらに直面すると、問題として意識されることとなる。それはまず、驚き、疑問、当惑などとして現れる。」(6)とし、さらに、「不均衡状態に直面すると、周囲のものごとを観察したり探索したりして、これを同化しようと努め、そのままでは同化し難いときには、認知構造を調整させることにより、これを同化する。」(7)と述べて

いる。つまり、自分の考えと気付いた価値との間にずれがある場合、今までの自分の体験を思い出したり、他者の考えを聞いたりしながら、今までの価値を修正して新たな価値観を形成しようとするのである。このようにして、自己の内面との対話により価値の自覚が深まっていくのである。つまり、価値が内面化されていくのである。この「心が揺さぶられ、動く」段階は、生徒の思考を促すことで、価値の更なる深まりを図るため、価値の知的理解を促す段階であると考えられる。

さらに、価値の自覚が深まったことにより、それまでの自分の体験が単なる体験から意味ある経験として蓄積され、その価値を日常生活に反映させようとする意欲や態度が育成されたときが「心が響く」段階である。この「心が響く」段階に到達して、初めて道徳的価値に裏打ちされた道徳的実践力が育成されたということができるのである。そして、この育成された道徳的実践力が日常生活の行動に反映されることを道徳的実践と捉えた。

以上の心の変化を踏まえて、心に響く道徳の時間とするための、「改善の視点」を整理すると、図1-1の右列ようになる。改善の視点としては、昨年度の研究で、「道徳の時間へのアプローチの視点」と「道徳の時間そのものの視点」の二つの視点を明らかにしている。(8)ただし、これらの視点はどちらか一方だけを改善すればよいというものではなく、双方を効果的に改善しなければ、「心に響く道徳の時間」には発展しないのである。

まず、「道徳の時間そのものの改善の視点」は、価値が心に残ったり、内面との対話で心が揺さぶられたり動いたりすることと深く関わっている。教材や授業方法、授業形態を工夫して、様々な角度から価値に迫ることは、道徳の時間のねらいとしている価値にしっかりと気付き、その価値を手がかりにして自己の内面と深く対話することに大きな影響を与えるからである。

また、「道徳の時間へのアプローチの改善の視点」は、道徳的実践力の育成においてとくに欠かすことのできない視点である。前述したように、道徳の時間が心に響くためには、内面化された価値が日常生活に結びつかなければならない。そのためにも、道徳の時間をその時間だけの単独のものとして捉えるのではなく、生徒の生活すべてと関連していることを生徒自身が身をもって感じ、また、生活に生かしていこうとする場面があることが大切である。

生徒の心に訴えかける教材を使い、適切な授業

方法と形態で道徳の時間を改善しても、それが生徒の体験と結びついて日常生活へと反映されていかなければ心に響いたとは言えず、道徳的実践力や道徳的実践には結びつかないのである。

この体験と道徳の時間との結びつきについて、金井肇は「子ども自らの体験を引き合いに出し、そこを通ることによって、指導内容は子ども自身との結びつきができてくる。体験が資料と子どもを結ぶ通路になるのである。この意味でも、体験は大切である」(9)と述べている。このことから分かるように、教材との出会いに始まり、自己の内面との対話を通して価値が内面化されていくすべての過程で、生徒のどのような体験(この場合の体験とは、学校教育活動以外の体験もすべて含んでいる)から道徳の時間にアプローチするのには「道徳の時間そのものの視点」とともに重要な視点なのである。

(2) 心に響く道徳の時間を通して培われる力

前項で述べたように昨年度の研究では心に響く道徳の時間をめざし、道徳の時間そのものと道徳の時間へのアプローチという二つの視点からの工夫を取り入れた学習プログラムを開発した。(10)資料として音楽や写真を用いたり、フォトランゲージの手法を用いたりするなどの道徳の時間そのものの工夫と、生徒の体験を生かした道徳の時間を展開するというアプローチの工夫を取り入れ、道徳の時間の改善を図ったのである。その結果、生徒の内面では道徳的価値の自覚が促され、その価値を日常生活に反映させようとする意欲や態度が培われたことが実証された。しかし、ここで育成された道徳的実践力が、生徒の日常生活と結びつき、実際の生活の中で行動として表れるには、二つの視点からの道徳の時間の改善に加え、道徳の時間と生徒の生活を結びつける新たな視点が必要なのではないかと考えた。

そこで、中学校学習指導要領道徳の目標にある「生き方」というテーマに着目した。目標には、「道徳的価値及び人間としての生き方の自覚を深め、道徳的実践力を育成するものとする。」(11)という一文がある。この部分を小学校の学習指導要領と照らし合わせてみると、「人間としての生き方」という言葉が中学校では付け加えられていることがわかる。

「人間としての生き方」の自覚を深め、道徳的実践力の育成を図るということは、これから出会うであろう様々な場面で人としてよりよく生きていくための力を身につけるために、道徳的価値の

自覚を自らの生き方の問題として深めていくことを意味している。もちろん、このことは小学校の道徳の時間においても重視されている点である。しかし、金井肇が『生き方』には、行為の面とともに、生きがいの問題がかかわっている。生きがいの探求とかかわって進路も選ばれることになる。(12)と述べていることでも分かるように、「人間としての生き方」という言葉は、中学生という時期が自分の進路選択とも関わって、将来の自分の生き方に関心をもち始め、自分の人生を「いかに生きていくべきか」ということを真剣に模索し始める時期に当たるということを踏まえたものであり、特に中学生においては、この点が重視されなければならないと考えた。

つまり、「生き方」という視点を道徳の時間の基盤に据えることが、自覚した価値を日常生活へ反映させることにつながるのではないかと考えた。

以上のことを踏まえ、本研究の学習プログラムの開発に当たっては、特に次の2点に注目した。

道徳の時間に自覚した価値が日常生活に反映することをめざし

生徒自身の体験と道徳の時間を結びつけ、気付いた価値を自分のこととして自覚する。道徳の時間の基盤に「生き方」の視点を据え、自覚した価値を自らの生き方の問題として深める。

第2節 職場体験を通して学びとる道徳的価値

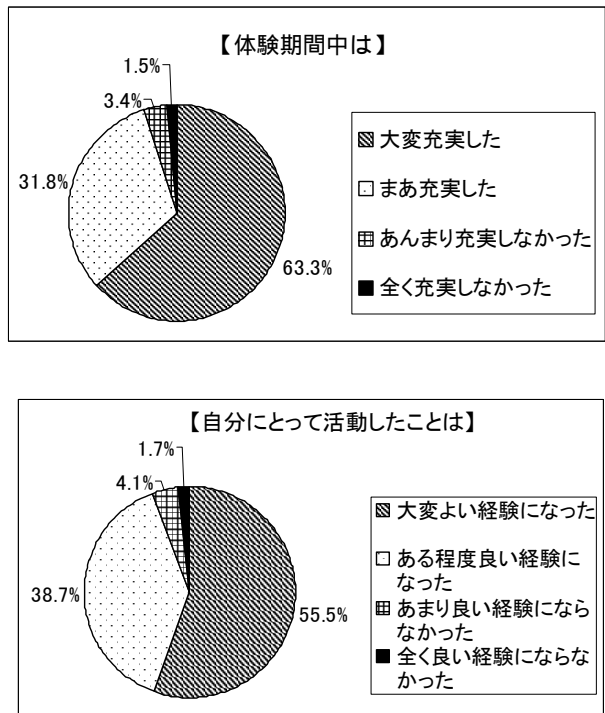
(1) 職場体験と道徳の時間を結びつける意義

ところで、「生き方」の視点で近年大切にされている体験に職場体験がある。

本市立中学校では、平成12年度に18校で『生き方探究・チャレンジ体験』という名称で職場体験が開始された。平成13年度には、それが54校に広まり、本年度からは全市立中学校で実施されるに至った。

平成13年度の『生き方探究・チャレンジ体験』の取組のまとめの中で「自分の生き方や将来を考えるようになったり、働くことの厳しさや楽しさを学んだり、また、人のふれあいの温かさや人間関係の大切さを実感したりとひとまわりもふたまわりも大きく成長した。」(13)という生徒の紹介されている。また、生徒のアンケート結果(図

図1-3 平成13年度『生き方探究・チャレンジ体験』アンケート結果



1-3)(14)からも分かるように、体験期間中を「大変充実した」「まあ充実した」と肯定的に受け止めている生徒は、合わせて95.1%である。また自分にとって活動したことが「大変良い経験になった」「ある程度良い経験になった」と考えている生徒は合わせて94.2%であり、多くの生徒がこの取組に対して前向きに行動し、自分にとって意味のある体験であったと考えていることが分かった。しかも、二つの結果が共に9割を超える数字であることは驚きですらある。学校という限られた場だけでは得ることの出来ないものを掴み取っているのである。

また、学校教育活動において職場体験は、特別活動の領域の「C学校行事(5)勤労生産・奉仕的行事」に位置づけられている。中学校学習指導要領における特別活動の目標は「(略)人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」(15)となっている。この「人間としての生き方の自覚を深め」という部分については、道徳の目標と共通している。

さらに、中学校学習指導要領解説 特別活動編における「勤労生産・奉仕的行事」に関する記述の中では「これらの体験を通して、勤労の尊さや意義を理解し、職業や進路の選択に役立つ勤労観や職業観を身に付けたり、共に生きる人間として必要な社会福祉の精神を身に付けるなど、将来の社会人としての生き方を深めることができるよ

うに指導することが大切である。」(16)とあり、職場体験を通して「生き方」を深めることがねらいとなっていることは明らかである。

西村日出男が「道德教育の目標は、特別活動という実践の場面における指導を通して達成されることが多い」(17)と述べていることから分かるように本来、道德教育と特別活動は密接した関係にあり、お互いが連携を取ることは、双方がそれぞれの目標を達成するためには大変意味のあることである。とりわけ、職場体験と道德の時間は「生き方」を探究する上で、関連が深いと思われる。つまり、道德の時間で道德的価値及び人間としての生き方の自覚を深め、職場体験での実践を通してそれを実感し、より深めていくのである。

この職場体験と結びついた道德の時間については、その重要性を感じながらも今まであまり触れられていない点である。

これまでから中学校では、職場体験と関連した様々な取組がなされてきている。たとえば、職場体験前の取組として「仕事調べ」をして社会には多くの職業があることや、その中には資格の必要な職業や、学歴が必要な職業、専門的知識が必要な職業などの種類があることなどを学習している。また、体験の後には発表会を開いて、みんなで感動を共有するという取組もされている。

しかし、実際に体験することで実感した道德的価値を、道德の時間に自らの「生き方」の問題として深める取組にまで発展していないことが多かった。次項で明らかにするが、職場体験には多くの道德的価値が含まれており、生徒はそれを肌で感じとってきている。しかも、生徒にとっては、職場という学校とは異なった環境の中での体験であるために、今までにない深い価値の実感をしているのである。

このような生徒にとって貴重な体験である職場体験をそれだけで終わらせるのではなく、道德の時間と結びつけて道德的実践力を育成し、道德的実践へと発展させることは、自覚した価値を自らの生き方の問題として深め、日常生活に反映させていく上で大変意義があると考えた。

(2) 道德的価値の視点による職場体験の分析

職場体験と結びついた道德の時間の学習プログラムを開発するにあたって、まず、双方が連動する基軸となる道德的価値を見つけることが必要である。

そのために、職場体験の感想文を道德的価値の視点で分析することにした。分析の対象は、平成

13年度に『生き方探究・チャレンジ体験』を実施した藤森中学校の354人の生徒感想文である。

感想文の中から道德的価値に関する言葉や文章を拾い集めていき、職業のジャンル別で集計することにした。

その際の分析の視点となる道德的価値は、昨年度の研究で、中学校学習指導要領に示されている道德の23の内容項目を30のキーワードにしたものを使用することにした。(18)このキーワードは、小学校の低学年から中学校までの内容項目をその系統性・発展性を踏まえて分析したものである。23の内容項目を30のキーワードにしたのは、内容項目の中にはいくつもの価値が複合しているものがある上、体験の中にもいくつもの価値が混在しているため、双方に含まれる価値をより明確に結びつけるためである。そして、この30のキーワードと感想文中の価値を結びつける視点が表1-1である。

表1-1 職場体験感想文の分析の視点

	内容項目	キーワード	感想文分析の視点
1 主として自分自身に関すること	1-1 望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をす。	「節度・自立」	『節度』『自立』『生活習慣』『健康』
	1-2 より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。	「努力」 「忍耐・意志」 「希望・向上心」 「判断・勇気」	『努力』『頑張る』『達成感』 『忍耐』『何回も』『やり抜く』 『希望』『夢』『将来』『向上』 『良いこと・悪いこと』『勇気』
	1-3 自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。	「自主・自律」 「正直・誠実」	『自主的』『規律』『けじめ』 『明るい』『誠実』『元気』『正直』
	1-4 真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。	「真理・理想」	『真理』『理想』
	1-5 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。	「思慮・反省」 「個性伸長」	『自分を見つめる』『反省』 『個性』『性格』『長所・短所』『成長』

	内容項目	キーワード	感想文分析の視点
2 主として他の人とのかわりに関すること	2-1 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。	「礼儀」	『挨拶』『笑顔』『礼儀』
	2-2 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し感謝と思いやりの心をもつ。	「思いやり・親切」 「尊敬・感謝」	『優しさ』『思いやり』『心温まる』『お年より』『親切』 『感謝』『ありがとう』『うれし』『尊敬』
	2-3 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。	「友情・信頼」	『友達』『信頼』『仲良く』『助け合い』
	2-4 男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。	「異性理解」	『男女』
	2-5 それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解して、謙虚に学ぶ広い心をもつ。	「寛容・謙虚」	『いろいろな人』『いろいろな考え方』

内容項目	キーワード	感想文分析の視点
3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること	3-1 自然を愛護し、美しいものに感謝する豊かな心を持ち、人間の力を越えたものに対する畏敬の念を深める。	「自然愛」 『動物』『植物』『自然』
	3-2 生命の尊さを理解し、かたがえのない自他の生命を尊重する。	「敬虔・畏敬」 『美しさ』『素晴らしい』
	3-3 人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることの喜びを見いだすように努める。	「生命尊重」 『命』『生きる』

内容項目	キーワード	感想文分析の視点
4 主として集団や社会のかかわりに関すること	4-1 自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。	「役割・責任」 『協力』『分担』『責任』
	4-2 法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。	「権利・義務」 『きまり』『法』『権利』『義務』
	4-3 公徳心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。	「公徳心」 『みんなのもの』
	4-4 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。	「正義・公平公正」 『正義』『公平公正』『差別』『偏見』
	4-5 勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。	「勤労・奉仕」 『勤労の大切さ・大変さ・厳しさ』『やりがい』『社会の一人』『奉仕(ボランティア)』
	4-6 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。	「家族愛」 『家族への感謝』『家族への尊敬』
	4-7 学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。	「愛校心」 『学級』『学校』『先生』『校風』
	4-8 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者ら尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。	「郷土愛」 『地域』『郷土の文化、伝統』
	4-9 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。	「愛国心」 『日本人』『日本の文化、伝統』
	4-10 世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。	「国際理解」 『外国の文化』『世界の平和』『人類の幸福』『国際的視野』

平成13年度、藤森中学校では354名の生徒が112ヶ所の事業所に分かれて、『生き方探究・チャレンジ体験』を実施している。体験後、各生徒は感想文を書き、一冊の冊子としてまとめられた。その冊子に載せられているすべての生徒感想文を表1-1にしたがって分析した。ただし、感想文の中には、複数の価値が読み取れるものもあれば、価値が読み取れないものもあった。

表1-2は、その分析結果を職業のジャンル別にまとめたものである。結果をみると、30のキーワードの中で、高い数字を示しているキーワードがいくつかあることが分かる。その中でも特に高い数字を示した六つのキーワードを感想文から読

み取れる生徒の姿と関連させながら紹介していきたい。

「勤労・奉仕」

生徒にとっては、社会の中で、働く大人と一緒に活動をする初めての体験である。今まで、漠然と捉えていた仕事に対する自分の考え方が甘かったことに気づき、改めて仕事の厳しさを実感していた。そして、そういう厳しい仕事を大人たちが責任をもってこなしていくからこそ、社会全体が成り立っているのだという仕事の大切さも知ったようであった。また、そんな厳しい仕事であるにもかかわらず、働く大人たちが信念をもって、生き生きと仕事をしている姿に感動していた。そして、働く大人たちが、どんなことを考えて、仕事をしているのかも知り、自分が社会に出たときに、この体験を生かそうとしている姿が感じられた。まさしく、勤労の尊さや意義を体感していたようであった。

「尊敬・感謝」

職場体験に不安や緊張をもつ生徒がほとんどであったが、その不安や緊張を解きほぐしてくれたのが、事業所の人やそこを訪れた人からの温かい言葉かけであったようだ。そして、そのことに対して、素直にうれしいと感じ、心からの感謝の気持ちを抱いていた。

「礼儀」

初めての職場で、「おはようございます」と不安な気持ちで挨拶をしたときに、職場の人から返事が返ってきたことがきっかけとなり、職場に溶け込めた生徒も多かった。挨拶が人間関係において重要であることを実感していた。また、接客を体験した生徒の多くが、なかなか「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」という言葉が出ずに、後悔していた。店の人から、大きな声で心をこめて挨拶することの大切さや、相手への礼儀は、相手を尊重している心の表れであることを教えられ、礼儀の意義を実感していた。

「努力」

厳しい仕事に、心身ともに疲労しながらも、自分に与えられた仕事に精一杯取り組む中で、生徒は、努力してやり終えたときの充実感、達成感を感じていた。そして、その中で、今まで気付かなかった自分を発見し、自分自身に驚くと同時に、困難なことでもやればできるんだという自信が生まれてきているのが読み取れた。

「希望・向上心」

実際に働くことを体験することで、仕事に対するイメージが現実味を帯び、自分の将来について

表1 - 2 平成13年度藤森中学校『生き方探究・チャレンジ体験』感想文分析結果

視点 内容項目	1					2					3			4																			
	1	2		3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10									
事業所(参加人数)	節度・自立	努力	忍耐・意志	希望・向上心	判断・勇気	自主・自律	正直・誠実	真理・理想	思慮・反省	個性伸長	礼儀	思いやり・親切	尊敬・感謝	友情・信頼	異性理解	寛容・謙虚	自然愛	敬虔・畏敬	生命尊重	強さ・気高さ	役割・責任	権利・義務	公徳心	正義・公平公正	勤労・奉仕	家族愛	愛校心	郷土愛	愛国心	国際理解			
病院・医院(29)				6		1					1	2					2		4						9	1		1					
介護(12)											1	5	2			1								1					4				
保育所(32)	2	3		3		1				2	2	2	6			2													13				
幼稚園(13)	3			1						2	2	2												1					5				
ボランティア(7)			1	1						1	1						1												5				
食品製造・販売(26)		1		1			4				4	5	4											2					10			2	
飲食店(22)		3								1	4	2	3			1								1					14				
機械製造・修理(24)		5	2	2		2				1	4		2			1								1					7				
販売店(73)		5	2	1			1	1			15	2	20																38	2			
美容・理容(11)	1			2						1	1	1	3			1								1					4				
接客業・サービス(43)		5		2								1	7											1					15				
建築・土木(3)																																	
公共施設(50)		1		3						1	4	1	9				1		1										26				
伝統産業(3)			1																										1				
その他(6)																													1		3		
合計(354)	6	23	6	22		3	6	1		6	39	21	58			6	4		5				8					152	3		4		2

真剣に考えるようになった生徒も多かった。「将来はこんな仕事がしたい」という希望をもち、そのために今自分がしなければならないことは何なのかを前向きに考え始めている生徒もいた。

「思いやり・親切」

初めての仕事に戸惑いながら取り組む自分たちに、職場の人たちが思いやりの気持ちをもち、親切な態度で関わってくださることに「思いやり・親切」という価値を実感していた。そして、そういう相手を思いやる気持ちが、円滑な人間関係を育む上で、非常に重要であることを学んでいた。

これらの結果からみても、職場体験には多くの道徳的価値が含まれていることは明らかである。そして、この分析を通して職場体験と道徳の時間を連動させる基軸となる道徳的価値を絞り込むことができたのである。

以上のことを踏まえ、今回の学習プログラムでは五つのねらいを設定した。【勤労】【思いやり・感謝】【礼儀】【努力】【希望・向上心】である。

この中の【勤労】については、分析をした際のキーワードは「勤労・奉仕」であったが、今回の『生き方探究・チャレンジ体験』には、「奉仕」という価値よりも「勤労」という価値の方が前面に表れているため一つに絞り込んでいる。また、キーワードの「思いやり・親切」「尊敬・感謝」については、感想文の分析をする中で、他者からの思いやりのある態度に対して感謝の気持ちを抱くと

いう表裏一体の関係が強く表れていたため、この二つのキーワードの「思いやり」と「感謝」に注目し、【思いやり・感謝】として一つにまとめることにした。

以上の五つの価値をねらいとする職場体験と道徳の時間を結びつけた学習プログラムを次章で展開することにする。

- (1) 『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説 道徳編』文部省 pp.2~3
- (2) 前掲 注1 p.3
- (3) 大津悦夫「楽しくわかる授業とは」『わかる授業づくりと到達度評価』地歴社 1984 p.17
- (4) 拙稿「中学校における心に響く道徳の時間の展開」『平成13年度研究紀要 Vol.2』京都市立永松記念教育センター 2002 p.4(図1-2)
- (5) 前掲 注4 p.4
- (6) 滝沢武久『ピアジェ理論の展開』国土社 1992 p.102
- (7) 前掲 注6 p.104
- (8) 前掲 注4 pp.4~5
- (9) 金井肇『道徳教育の基本原則』第一法規 1992 pp.264~265
- (10) 前掲 注4 pp.94~98 表2-3
- (11) 『中学校学習指導要領(平成10年12月)』p.98
- (12) 前掲 注9 p.266
- (13) 京都市教育委員会地域教育専門主事室『平成13年度「生き方探究・チャレンジ体験」推進事業(まとめ)』2002 p.2
- (14) 前掲 注13 資料
- (15) 前掲 注11 p.102
- (16) 『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説 特別活動編』p.74
- (17) 西村日出男「学校における道徳教育の全体構想」『新版道徳教育を学ぶ人のために』世界思想社 2001 p.150
- (18) 前掲 注4 pp.87~88

第2章 学習プログラムの開発と展開

第1節 学習プログラムの開発に向けて

(1) 学習プログラムの開発における留意点

前章では職場体験と結びつけた道徳の時間の学習プログラムを開発するために、双方が連動する基軸となる道徳的価値を明らかにした。

また、学習プログラムを開発するにあたっては、道徳的実践力の育成に向けて双方を効果的に結びつける工夫も重要である。そのために、すでに昨年度の研究で証明したユニット(19)を活用した。

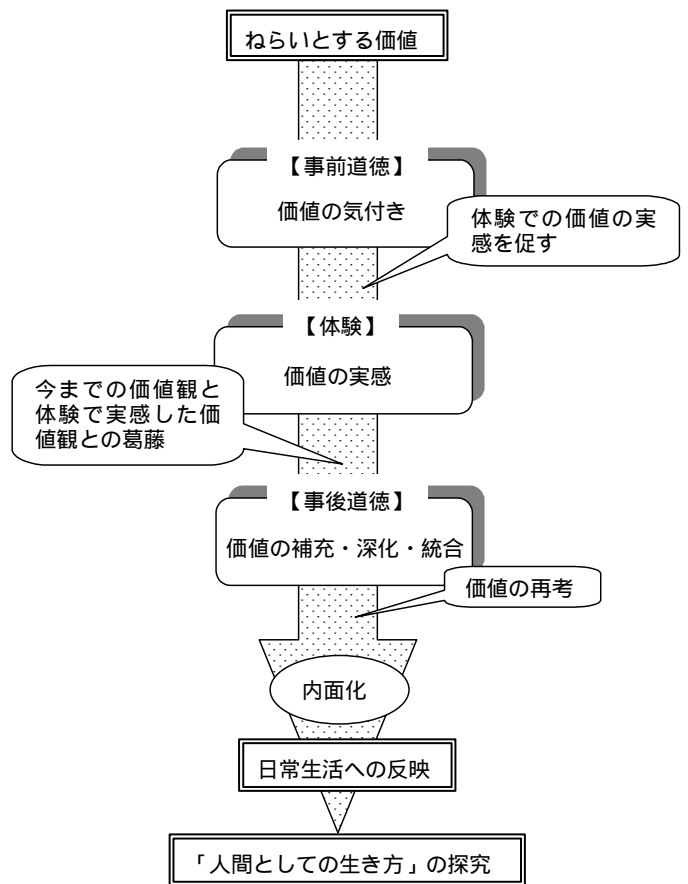
ユニットとは、体験の前後に道徳の時間を設定し、「事前道徳」「体験」「事後道徳」を一つのまとまりと捉え、共通のねらいのもとで学習を進めるものである。事前道徳、体験、事後道徳という流れの中で、ねらいとしている価値は次第に深まりをもち、道徳的実践力が育成され、さらには「人間としての生き方」を探究する基盤となっていくのである。

このユニットを活用して道徳的実践力を育成することの有効性については、昨年度の研究で次の3点を明らかにしている。第一に、ユニットが一つのねらいのもとに展開されるために、連続した思考による価値の自覚の深まりがあること。第二に、生徒の体験を生かすことでより深く自己の内面で対話をすることができること。第三に、体験で個々の生徒が実感した価値を道徳の時間に学級で共有することで、価値の補充・深化・統合が図られ、単なる体験が意味ある経験として生徒の内に蓄積されることの3点である。(20)

また、事前道徳・体験・事後道徳には、道徳的実践力の育成に向けて、その流れの中でそれぞれが担っている役割がある。その役割について図2-1をもとに説明したいと思う。

まず、事前道徳には、ねらいとする価値に気づき、その価値を体験で実感することを促すという役割がある。体験には多くの価値が含まれているため、それぞれの生徒は様々な価値をそこで実感することになる。もちろん様々な価値を実感することは大切なことである。しかし、ユニットとして一つのねらいに迫っていくためには、実感した価値の中に、そのユニットがねらいとする価値が含まれていることが大切なのである。そこで、事前道徳では、ねらいとする価値を体験で実感するためにその価値に焦点を当て、自分の価値観を明確にしておく展開が望まれるのである。そうする

図2-1 ユニットにおける道徳的実践力育成の構造図



ことで生徒は課題意識をもって体験に取り組むことができるのである。

次に、体験には、実際に価値に触れることを通して価値を実感し、自分の価値に対する認識を再考するという役割がある。事前道徳で認識した自分の価値観と、実際に価値に触れたことによって得た価値観を自分の中で対峙させることによって、新たな葛藤が生まれるのである。そして、価値の自覚が深まっていくと思われる。

さらに、事後道徳には、それぞれの生徒が体験を通して深めた価値の自覚を学級で共有することによって、補充・深化・統合し、価値を内面化するという役割がある。とくに、事後道徳における体験の意義は非常に重要である。七條正典は、道徳教育における体験の意義を「学習の主体化」「学習の深化」「学習の意欲化」の3点にまとめている。つまり、体験を取り入れることにより、生徒の心や体に直接働きかけ内面をゆさぶる指導は、生徒にとって指導される内容を我がこととつないで考えることができやすくなり、主体的な学習を促すことになる。また、さまざまな体験の蓄積は、生徒にとって道徳的な内容に関して考える際に、抽象的な思考にとどまらず、問題の状況を具体的に

イメージしながら思考を深めることを助ける。さらに、道德の時間に学ぶ道德的内容にかかわる体験をもつことによって課題意識をもって道德の学習に取り組むことができ、道德の時間で学んだことを体験の場で具体的に生かす機会があると、自分の認識の度合いや、その問題点を確かめることになる新たな課題の発見につながり、学習の意欲化を促すというのである。(21)

この三つの意義からみても道德と体験が深く結びついており、特に体験を事後道德でどのように生かすのが大切であることが分かる。そのために、本プログラムでは体験と道德の時間をユニットとして結びつけることに加え、事後道德に体験を教材化したものを資料として活用することを提示した。先に述べたように、事後道德には体験で実感した価値を学級で補充・深化・統合することによって、価値の自覚をさらに深める働きがある。そのため、生徒自らの体験を教材として活用することは、道德の時間に体験で実感した価値を想起し、自覚した価値を自分の生活に結びつけて捉えることにおいて有効であると考えたのである。

本学習プログラムでは、体験を教材化する方法として、体験時の生徒の様子を撮影したビデオを再構成して資料としたり、体験で関わってくださった事業主へのインタビューを資料としたり、体験の生徒感想文を資料としたりして活用している。その他、考えられる方法としては、体験の場面を使ったロールプレイ、体験時の写真を使ってのフォトランゲージ、体験での葛藤場面をつかったブレインストーミングなどがあると思われる。

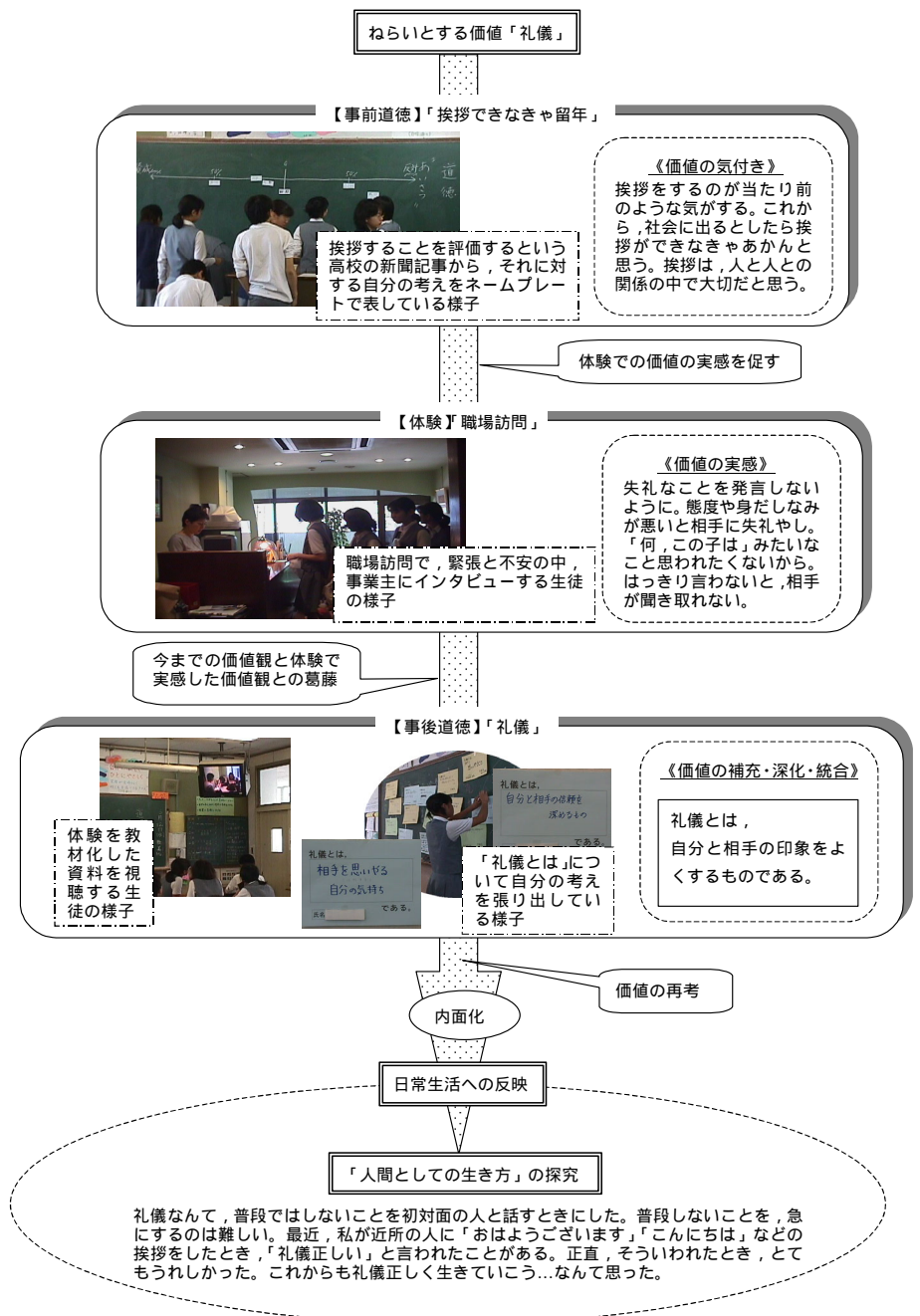
このようにして、事前道德・体験・事後道德という流れの中で内面化された価値は、体験と結びつきが深いので、日常生活へ反映しようとする意欲や態度が培われると考えられる。また、日常生活へと反映された価値

は、「人間としての生き方」を深めていくうえでの基盤となるはずである。これが体験と道德の時間を結びつけたユニットにおける道德的実践力育成の構造である。

最後に、具体的な実践例を挙げてこのユニットの流れをもう一度整理してみたいと思う。研究協力校では、一学期に『生き方探究・チャレンジ体験』の一環として職場を訪問し、事業主の方にお話を伺うという取組をしている。この体験と結びつけ、ユニット「礼儀」を実践した。その流れを図2-2で説明したいと思う。

事前道德の前に、生徒は、総合的な学習の時間

図2-2 ユニット「礼儀」での道德的実践力育成の様子（M子より）



で、仕事調べをしている。そして、その調べた仕事の中から、自分の興味がある仕事ごとにグループを作り、自分たちで、職場訪問の交渉を行っている。その後、実際の職場訪問の前に事前道徳「挨拶できなきゃ留年」の学習をした。まず、ある高校が挨拶に対して、A・B・Cで評価をするという新聞記事についてどう思うかについて、自分の内面と対話し、礼儀に対する自分の価値観を明確にしていた。職場訪問に礼儀という価値に対する課題意識をもって臨むためである。

実際の職場訪問では、今まで自分が思っていた礼儀に対する価値観が実感した価値観とぶつかり合い、さらに価値の理解を深めることになった。

また、事後道徳「礼儀」では、体験を教材化したものを資料として活用した。自分たちが事業所に行って挨拶している様子が撮影されたビデオを視聴することで生徒は、自分たちの職場訪問の様子を思い出し、そのときに実感した価値を認識していったのである。そして、「礼儀とは」に続く文を一人一人が言葉にし、全員が発表した。他の人の意見を知ることで、生徒の内にある価値観が補充・深化・統合されて、新たな価値に対する自覚が生まれ、価値の内面化が図られたのである。

その後、内面化した価値は、生徒の日常生活に反映される契機となり、人間としての生き方を探究する上での指針となっていくと考えられる。

これらの特徴をもつユニットを基に、次節で提示する学習プログラムを開発したのである。

また、このようにして開発した学習プログラムの有効性、妥当性を検証するために、本研究では、「自己点検カード」で、生徒の道徳的価値についての意識と実践力の高まりを検証することにした。以下、次項でその内容について述べることにする。

(2) 自己点検カードについて

道徳的実践力が育成されたかを検証することは、困難なことであるとよく言われている。

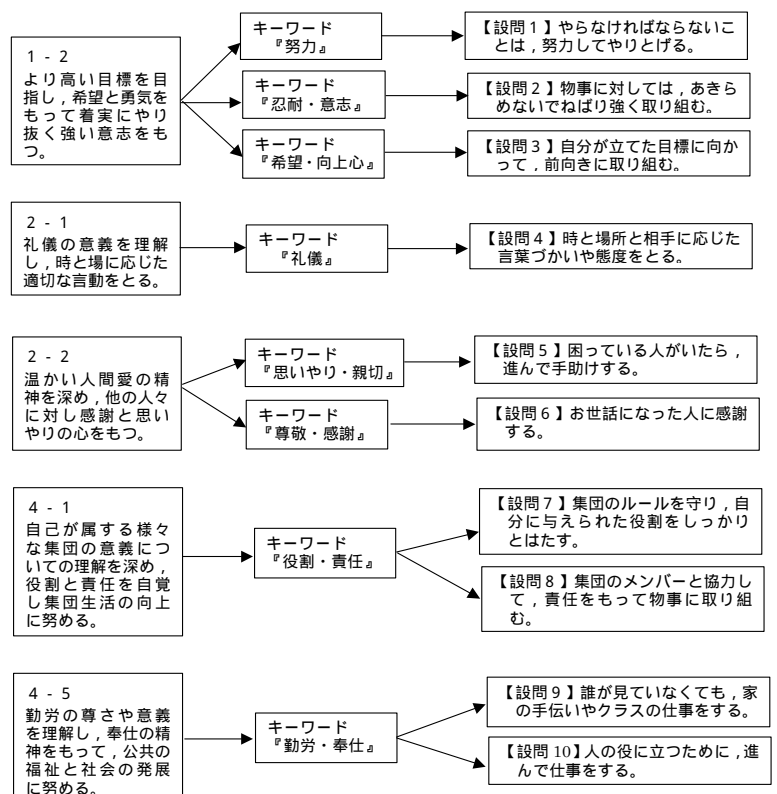
それは、道徳的価値の自覚は生徒の内面のことであり、表面的には道徳的な行為であると見えても、果たしてその行為が道徳的価値に裏打ちされた行為であるかは、第三者には判断できないためである。教科の学習のように、その内容が理解できているかをテストなどで判断

することはもちろんできない。

そこで、昨年度は生徒の授業中の発言内容や様子、あるいは、ワークシートの記入内容や感想文などから道徳的実践力が育成されたかを読み取ることを中心に行った。しかし、そこには読み取る側の主観が入ることは否めなかった。この課題を解決するために本研究では、昨年度の検証方法に加え、生徒自身が自分の内面を振り返るという自己点検カードを実施し、生徒の意識と実践力の変容を分析することで、道徳的実践力の育成の様子を検証することにした。

自己点検カードの設問項目は、前章で生徒の感想文を道徳的価値の視点で分析することによって明らかにした職場体験と関連の深い道徳的価値（「勤労・奉仕」「思いやり・親切」「尊敬・感謝」「礼儀」「努力」「希望・向上心」）に職場体験と深く関係するだろうと推測した道徳的価値（「忍耐・意志」「役割・責任」）を加えた合計8個の価値に関するものである。そして、その価値が日常生活で実践されている場面を想定し、設問内容を具体化した。その設問構造が図2-3である。

図2-3 自己点検カード・設問項目の構造



図で示すように、10個の設問は、視点1の「対・自分」に関する設問が3問、視点2の「対・他人」に関する設問が3問、視点4の「対・集団、

図 2 - 4 自己点検カード

今から 10 の項目について 2 種類 (A・B) の質問をします。今の自分を見つめ、ありのままに答えてください。

2年 組 番 氏名 _____

A

あなたが、それぞれの項目を学校生活や家庭生活をするうえで、どのくらい大切だと思っているかについて聞きます。【とてもそう思う】【まあまあそう思う】【あんまりそう思わない】【まったくそう思わない】の 4 つの中から 1 つを選んで、をつけてください。

	項 目	とてもそう 思う	まあまあそ う思う	あんまりそ う思わない	まったくそ う思わない
1	やらなければならないことは、努力してやりとげる。				
2	物事に対しては、あきらめないでねばり強く取り組む。				
3	自分が立てた目標に向かって、前向きに取り組む。				
4	時と場所と相手に応じた言葉づかいや態度をとる。				
5	困っている人がいたら、進んで手助けする。				
6	お世話になった人に、感謝の気持ちをもちつ。				
7	集団のルールを守り、自分に与えられた役割をしっかりと果たす。				
8	集団のメンバーと協力して、責任をもって物事に取り組む。				
9	誰が見ていなくても、家の手伝いやクラスの仕事をすする。				
10	人の役に立つために、進んで仕事をすする。				

B

あなたが、それぞれの項目を学校生活や家庭生活上で、どのくらい実行しているかについて聞きます。【よく実行している】【ときどき実行している】【あんまり実行していない】【まったく実行していない】の 4 つの中から 1 つを選んで、をつけてください。

	項 目	よく実行し ている	ときどき実 行している	あんまり実 行していな い	まったく実 行していな い
1	やらなければならないことは、努力してやりとげる。				
2	物事に対しては、あきらめないでねばり強く取り組む。				
3	自分が立てた目標に向かって、前向きに取り組む。				
4	時と場所と相手に応じた言葉づかいや態度をとる。				
5	困っている人がいたら、進んで手助けする。				
6	お世話になった人に、感謝の気持ちをもちつ。				
7	集団のルールを守り、自分に与えられた役割をしっかりと果たす。				
8	集団のメンバーと協力して、責任をもって物事に取り組む。				
9	誰が見ていなくても、家の手伝いやクラスの仕事をすする。				
10	人の役に立つために、進んで仕事をすする。				

社会」に関する設問が 4 問ある。分析はそれぞれの設問ごとにするのに加え、視点ごとの分析も合わせてすることにした。自分という存在を人との関わりの中でどのように捉えているのかを探ることは、「人間としての生き方」を探究することと深く関わっていると考えたからである。

実際の点検カードでは、図 2 - 4 に示すように、その 10 個の設問について【意識】と【実践力】の面からそれぞれ自己点検するようになっている。

【意識】を問う A では、学校生活や家庭生活をするうえで『どのくらい大切だと思っていますか』という問に対し「とてもそう思う」「まあまあそう思う」「あんまりそう思わない」「まったくそう思わない」の四件法の形式をとっている。

また【実践力】を問う B でも、学校生活や家庭生活をするうえで『どのくらい実行していますか』という問に対して「よく実行している」「ときどき実行している」「あんまり実行していない」「まったく実行していない」の四件法の形式となっている。

この自己点検カードを研究協力校である藤森中学校の第二学年の生徒 338 名に実施し、学習プログラム実施前の 5 月 27 日と、学習プログラム実施後の 11 月 15 日の結果を分析し考察することにし

た。なお、自己点検カードの分析と考察の結果については、第 4 章で明らかにする。

第 2 節 学習プログラムの展開

(1) ユニットの構成とそのねらい

本研究で開発したユニットは五つである。この五つのユニットは、第 1 章で明らかにした職場体験と道徳の時間を連動させる基軸となる五つの道徳的価値をそれぞれのねらいとしたものである。

五つのユニットのねらいは、【勤労】【思いやり・感謝】【礼儀】【努力】【希望・向上心】である。ここでは、それぞれのユニットについて、その構成とねらいを明らかにしていきたいと思う。また、表 2 - 1 ~ 表 2 - 5 は、それぞれのユニットのねらいと、ユニットを通して道徳的実践力が育成されていくときに予想される生徒の心の変化を表している。




ユニット「勤労」

「勤労」という価値は、職場体験において生徒が一番多く気付く価値である。働くことが社会生活において欠かすことのできない大切なことであることは、頭では理解していても、実際に「勤労」という場面に遭遇することのなかった生徒にその

実感はない。職場で実際に働く大人を見て、そして一緒に働くことを通して、それまでもっていた「勤労」という価値に対する自分たちの認識の甘さを知ったり、働く大人の何気ない行動にも「勤労」に対する厳しさがこめられていることに気付いたりするのである。たった三日間ではあるが、貴重な体験である。この体験から得た「勤労」に対する価値観を自分の中で振り返り、他の人の「勤労」に対する価値観と照らし合わせることで新たな発見をし、価値の自覚を深めていくのである。本研究でのユニット「勤労」は、そんな「勤労」に対する自分の価値観をランキングという手法を用い、明確にしていく展開となっている。

「何のために仕事をするのか」という価値観は人によって様々であり、しかも決まった価値観も存在しない。しかし、ただお金のためだけに大人は働いているのか、なぜあんなに厳しい仕事を毎日やっていけるのかを体験を通して垣間見るだけでも、生徒の価値観は深まっていくはずである。その深まりを自分で見つめ「勤労」という価値を深め、内面化させることがこのユニットでのねらいである。

表2-1 ユニット「勤労」のねらい

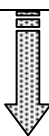


ユニット「勤労」のねらい	
働くことの意義を考えたり、他の人の考えを知ったりすることを通して「勤労」という価値を深く自覚し、内面化した価値を日常生活に反映させようとする意欲や態度を育成する。	
生徒の心の変化	
事前 道徳	【道徳『仕事を選ぶとき』】 一人一人がもっている価値観が異なることを理解し、自分がもっている「勤労」に対する価値観を認識する。
	事前道徳での自己の内との対話によって、自分の「勤労」に対する価値観を知り、職場体験でその価値観を確かめてみようとする意欲がわく。
体験	【職場体験】 体験を通して「勤労」という価値を実感することで、自己の内面との新たな対話が生じる。
	事前道徳で認識した自分の価値観と、体験を通して実感した価値観との葛藤が生じる。
事後 道徳	【道徳『仕事をするってどういうこと』】 葛藤を通して気付いた価値と他の人の価値に対する考えとの照らし合わせによって、仕事をするのが生きがいや自己実現につながることを理解する。
	将来に向けて、生きがいや自己実現のために自己の人生を切り拓いていこうとする意欲をもち、自分の生活に生かしていこうとする。

「思いやり・感謝」

生徒にとって「思いやり・感謝」という価値は、職場体験に限らず、日々の生活の中でも実感でき

るものである。しかし、初めての場所、見知らぬ大人という環境の中だからこそ、生徒はそこでの思いやりのある言葉かけや態度に深く感動し、その行為に対して今まで感じたことのない感謝の気持ちを抱くのである。実際に緊張と不安の中で職場を訪れた生徒は、職場の人の励ましの一言に緊張がほぐれ、それに対して感謝の念を抱くのである。この体験を通し、「思いやり・感謝」という価値を、職場という新たな視点から深めることがねらいである。

表2-2 ユニット「思いやり・感謝」のねらい

ユニット「思いやり・感謝」のねらい	
人からの思いやりのある行為をしっかりと受け止め、それに対して深い感謝の気持ちを抱くことの大切さを理解し、これからの生活に生かしていこうとする意欲や態度を育成する。	
生徒の心の変化	
事前 道徳	【道徳『とべないホテル』】 本当の優しさとは、自分の主観的な判断で行う行為ではなく、相手の立場に立ってどうすることが一番よいことなのかを考えて行う行為であることに気付く。
	事前道徳で本当の優しさについて考えを深めた生徒は、職場体験での思いやりのある行為にしっかりと気付くことができ、深い感謝の気持ちを抱こうとする。
体験	【職場体験】 職場という緊張と不安の入り混じった環境の中で、相手からの思いやりのある行為を受け、「思いやり」「感謝」という価値を実感する。
	今までの生活で自分が思いやりだと思っていた行為と、自分が職場体験で受けた行為とを照らし合わせることで、価値を深める。
事後 道徳	【道徳『礼状を書こう』】 職場体験で周りの人たちから受けた思いやりのある言葉かけや態度を思い出し、それに対して深い感謝の気持ちを抱き、その気持ちを相手に伝えるために心をこめて、「礼状」を書こうとする意欲をもつ。
	職場という今までに経験のなかった環境で、「思いやり・感謝」という価値を深め、自己の内に内面化させたことを日常生活に生かしていこうとする。

「礼儀」

「礼儀」という価値は、学校生活のみならず家庭生活においても幼少の頃から重視されてきた価値である。しかし、「礼儀」の中の「挨拶」について考えてみると、小学校の低学年ころまでは、何の抵抗もなく挨拶できていた子どもたちも、中学生という自我が芽生える時期に入ると、相手への気恥ずかしさからか、なかなか今までのように挨拶できなくなる傾向にある。頭では、「礼儀」の大切さは理解できている。しかも、心のこもった「礼儀」が一番大切なことも充分知っている。しかし、行為として表すことに抵抗があるのである。しか

し、職場体験では、身をもって「礼儀」の大切さを知ることとなる。とりわけ、接客業を体験した生徒は、「礼儀」の中でも「挨拶」の重要性を肌で感じ取ってくる。そこで、このユニットでは、今まで知識として理解していた「礼儀」という価値を実感することで、より深め、自分なりの礼儀の意義を自覚していくことがねらいである。

表2-3 ユニット「礼儀」のねらい

<p>ユニット「礼儀」のねらい 体験を通して、礼儀が社会生活を営んでいく上で、必要不可欠なものであることを実感すると同時に、礼儀の意義を理解し、これからの生活に生かしていこうとする意欲や態度を育成する。</p>	
生徒の心の変化	
事前 道徳	<p>【道徳『挨拶できなきゃ留年』】 形式だけの挨拶ではなく、相手に対する敬愛の気持ちの表れた心のこもった挨拶が大切であることを理解する。</p>
↓	<p>職場体験で、相手の人に対して自分の誠意を表すために、しっかりと挨拶をしようとする気持ちをもつ。</p>
体験	<p>【職場体験】 初対面の人に挨拶をするという場面を体験し、価値を実感する。</p>
↓	<p>初対面の相手に心のこもった挨拶をしようとする気持ちと、実際の体験ではなかなか思うような挨拶ができないことに葛藤が生じる。</p>
道徳 事後	<p>【道徳『礼儀』】 円滑な人間関係を確立するためには、礼儀は欠くことのできないものであることを理解する。</p>
↓	<p>時と場所と相手に応じた礼儀を日常生活で実践しようとする。</p>

「努力」

努力することや、その姿を人に見られることを恥づかしいと感じる生徒が多い中、職場での体験は貴重である。職場では、「努力」を惜しむことは許されない。しかも、初めての仕事である。努力を出し惜しみするような余裕はないであろう。そんな環境の中で、自分の精一杯の力を出し切った生徒は、そこで充実感や達成感といったものを感じ、努力することの喜びを見いだす。このような体験を生かし、努力することの大切さや素晴らしさ、そしてその後の充実感や達成感までも含めた価値の自覚を深めることがこのユニットでのねらいである。

表2-4 ユニット「努力」のねらい

<p>ユニット「努力」のねらい 職場体験で、精一杯の努力をすることを通して得られた充実感や達成感を実感し、これからの自分の生活に生かしていこうとする意欲や態度を育成する。</p>	
生徒の心の変化	

事前 道徳	<p>【道徳『イチロー選手に学ぶ』】 一つのことを続けるためには、それをやり抜こうとする強い意志が必要であることを理解し、自分の目標に向かって努力をしようとする。</p>
↓	<p>職場体験で、自分に与えられた仕事を努力して最後までやり抜こうとする気持ちをもつ。</p>
体験	<p>【職場体験】 職場での仕事を通し、努力することの大切さや、充実感や達成感を実感する。</p>
↓	<p>今までの自分の「努力」に対する考え方や職場で実感した「努力」との間に葛藤が生じる。</p>
道徳 事後	<p>【道徳『努力』】 努力してやり抜くことで、充実感や達成感といった喜びが得られることを理解する。</p>
↓	<p>努力することの大切さやその結果得られる充実感や達成感を知り、これらの価値を自分の生活に生かしていこうとする。</p>

「希望・向上心」

職場体験を通じて、生徒は短期間ではあるが、社会に触れる。自分の興味・関心のある職場で体験ができた生徒は自分の将来に対して希望を抱き、目標をもつことができる場合もある。将来に対する漠然としたイメージが実際の職場を体験することで、現実味を帯びてくるのである。そして、現実味を帯びた将来に向かって、自分自身を高めていこうとする向上心が芽生えるのである。そんな将来に対する夢や希望に前向きに取り組むことの大切さを理解することが、このユニットのねらいである。

表2-5 ユニット「希望・向上心」のねらい

<p>ユニット「希望・向上心」のねらい 職場体験で漠然としていた将来に対する思いが現実味を帯びることを通して、目標に向かって夢や希望をもって自分自身を向上させようとする意欲や態度を育成する。</p>	
生徒の心の変化	
事前 道徳	<p>【道徳『義足のスプリンター』】 どのような状況においても、夢や希望を失わず、前向きに生きることを大切さを理解し、常に自分の可能性を信じて、やればできるという気持ちをもって行動する意欲をもつ。</p>
↓	<p>夢や希望を失わず生きることを大切さを知り、職場体験に前向きに取り組もうとする。</p>
体験	<p>【職場体験】 職場で夢や希望をもって働く大人の姿を通して価値を実感する。</p>
↓	<p>働く大人の姿と自分の将来に対する姿勢を照らし合わせることで、価値を深める。</p>
道徳 事後	<p>【道徳『将来の夢』】 将来の夢に向かって、今の自分をしっかりと見つめ、自分のよいところを伸ばす努力をしようとする。</p>
↓	<p>自分の将来に対する夢や希望を持ち、それに向かって自分自身を向上させようとする。</p>

(2) 五つのユニットの学習プログラム

前項で述べた五つのユニットでは、それぞれ事前と事後の2時間ずつの道徳の時間を展開している。表2-6は、五つのユニットのすべての道徳の時間、計10時間分の学習プログラムである。

もちろん、この五つのユニットの学習プログラムすべてを、同時に実施するというものではない。それぞれの中学校の教育目標や指導者の思い、生徒の実態を考慮して、五つのユニットの中から選択して実践するものと考えて開発した。

たとえば、図2-5に示すように研究協力校においては、この五つのユニットの中から、一学期に実施された職場訪問と結びつけて、ユニット「礼儀」を、また二学期の『生き方探究・チャレンジ体験』と結びつけて、「勤労」と「思いやり・感謝」の二つのユニットを実践した。

このように、職場体験と関連のある取組とこれらのユニットを結びつけて実践することも可能であるし、また、事前道徳と事後道徳を切り離して、他の体験と結びつけることもできるのではないかと考えている。

ただし、この場合は、事後道徳が職場体験を教材化した資料を活用した展開となっているため、資料を作り直したり、展開を再考したりする必要があると考えている。

図2-5 研究協力校におけるユニット実施時期

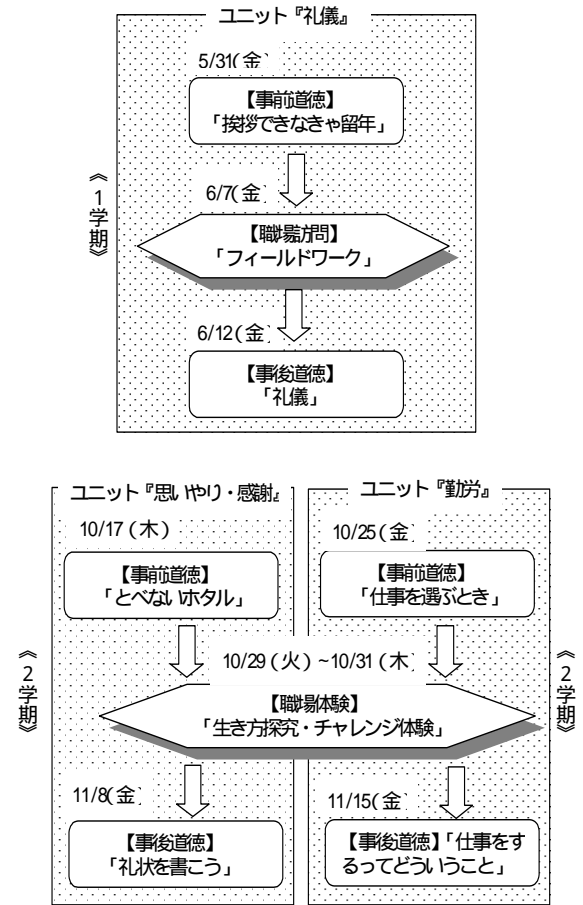


表2-6 職場体験と結びつけた道徳の時間の学習プログラム (5ユニット・計10時間分)

ユニットのねらい	道徳の時間のねらい	資料	学習の展開	評価
ユニット「勤労」	【事前道徳「仕事を選ぶとき」】 世の中には、様々な価値があり、一人一人もっている価値観が異なることを理解し、これから実施される「職場体験」において、働くことの意義を考える素地を培う。	ランキング用紙	タウンページを通して社会には、多くの仕事があることを知る。 「仕事を選ぶとき」というランキングをする。 ブレーストーミングで班のランキングを作成する。 班のランキングを学級で発表する。 職場体験で働くことの意義を考えてみようとする意欲をもつ。	世の中には、様々な価値があり、一人一人もっている価値観が異なることを理解できたか。 これから実施される「職場体験」において、働くことの意義を考えてみようとする意欲が培われたか。
	【事後道徳「仕事をするってどういうこと」】 仕事をするのが、生きがいや自己実現につながることを理解し、将来に向けて、自己の人生を切り拓いていこうとする意欲を培う。	事前道徳のランキング結果 事業所の方へのインタビュービデオ ランキング用紙	事前道徳のランキング結果を知って、その時の自分の考えを想起する。 事業所の方へのインタビュービデオを視聴し、仕事をするものの意義を考える。 事前道徳のランキングを再度やり直す。 仕事をするものの意義について感想を書く。	仕事をするのが、生きがいや自己実現につながることを理解できたか。 将来に向けて、自己の人生を切り拓いていこうとする意欲が培われたか。
人からの思いやりのある行為をしっかりと受け止め、それに対して深い感謝の気持ちを抱くこと	【事前道徳「とべないホタル」】 本当の「やさしさ」とは、どうすることが相手にとって一番よいのかを思いやる行為であることを理解すると	『とべないホタル』ハート出版・小沢昭巳・1988/12 『とべないほたる』ハート出	本時の流れを聞く。 資料を六場面に分け、話の次の展開を予想しながら、読み進める。(絵本の場面絵を黒板掲示する) 本時の感想を書く。	本当の「やさしさ」とは、相手にとって、どうすることが一番よいのかを思いやる行為であることを理解できたか。 人からの「やさしさ」

<p>ユニット「思いやり・感謝」</p>	<p>の大切さを理解し、これからの生活に生かしていこうとする意欲や態度を育成する。</p>	<p>同時に、人からの「やさしさ」に対して、感謝の気持ちを持ち、それを相手に伝えようとする態度を培う。</p> <p>【事後道徳「礼状を書こう」】 職場体験を通じ、人の「やさしさ」に触れたことに感謝の気持ちを持ち、その気持ちを相手に伝えることの大切さを理解し、礼状を心をこめて書こうとする意欲を培う。</p>	<p>版・小沢昭巳 作・吉田むねふ み画・1997/5</p> <p>職場体験時のビデオ 職場体験後の感想文</p>	<p>職場体験の初日と三日目のビデオを視聴する。 初日と三日目の違いを考える。 事業所の方たちのどんな言葉かけや態度によって、緊張がほぐれていったのかを思い出す。 事業所の方たちの言葉かけや態度をどのように感じたか思い出す。 職場体験後の感想文を読む。 事業所に心をこめた礼状を書こうとする気持ちをもつ。</p>	<p>に対して、感謝の気持ちを持ち、それを相手に伝えようとする態度が培われたか。</p> <p>職場体験で、人の「思いやり」に触れたことに対して、感謝の気持ちがもてたか。 感謝の気持ちを相手に伝えることの大切さを理解し、心をこめて礼状を書こうとする意欲が培われたか。</p>
<p>ユニット「礼儀」</p>	<p>体験を通して、礼儀が社会生活を営んでいく上で、必要不可欠なものであることを実感すると同時に、礼儀の意義を理解し、これからの生活に生かしていこうとする意欲や態度を育成する。</p>	<p>【事前道徳「挨拶しなきゃ留年」】 相手を一個の人格として認め、敬愛する気持ちをもって、心のもった挨拶をしようとする態度を育てる。</p> <p>【事後道徳「礼儀」】 円滑な人間関係を確立するためには、礼儀は欠くことのできないものであることを理解し、時と場所と相手に応じた、形と心をそなえた適切な言動をとろうとする態度を育てる。</p>	<p>『挨拶できなきゃ留年』毎日新聞 2001/5/2 付・一部改訂</p> <p>職場体験時のビデオ</p>	<p>挨拶の返事がなかった経験を思い出し、そのときの気持ちを振り返る。 資料を読む。 資料の挨拶の態度を評価することに対して「賛成」か「反対」かという自分の意志をネームプレートで示す。 自分の意見の理由を考える。 「賛成」と「反対」の班に分かれ、話し合う。 班の代表が班の意見を発表する。 挨拶は何のためにするのか、どんな挨拶がいいのかを考える。 本時の感想を書く。</p> <p>職場体験の時のビデオを視聴する。 事業所の方に接するとき、何に気がつけたか、なぜ気がつけたかを思い出す。 挨拶以外の他の礼儀を考える。 「礼儀とは...である」という文章を考える。 一人一人が「礼儀とは...である」を発表する。 本時の感想を書く。</p>	<p>挨拶に人と人を結びつける力があることに気づいたか。 挨拶をするときに、相手を一個の人格として認め、敬愛する気持ちが大切であることを理解できたか。 心のもった挨拶をしようとする態度が培われたか。</p> <p>円滑な人間関係を確立するためには、礼儀は欠くことのできないものであることを理解できたか。 時と場所と相手に応じた、形と心をそなえた適切な言動をとろうとする態度が培われたか。</p>
<p>ユニット「努力」</p>	<p>職場体験で、精一杯の努力をすることを通して得られた充実感や達成感を実感し、これからの自分の生活に生かしていこうとする意欲や態度を育成する。</p>	<p>【事前道徳「イチロー選手に学ぶ」】 一つのことを続けるためには、それをやり抜こうという強い意志が必要であることを理解し、自分の目標に向かって、やり抜こうとする意欲や態度を培う。</p>	<p>イチロー選手の普段着の写真 川上哲治・張本勲選手のプレー中の写真</p>	<p>川上選手の「ボールが止まって見える」という言葉から連想する。 張本選手の「ボールの縫い目が見える」という言葉の意味を考える。 イチロー選手の「他の選手が速いなと驚いているときでも、僕の目には遅く見えるのです」という言葉の説明を聞く。 イチロー選手の写真から帽子とサングラスの意味を考える。 イチロー選手が試合中に気をつけていることを考える。 一流選手とは、どういふ人なのか考える。 本時の感想を書く。</p>	<p>一つのことを続けるためには、それをやり抜こうとする強い意志が必要であることが理解できたか。 自分の目標に向かって、一つのことをやり続けようとする意欲や態度が培われたか。</p>

		【事後道徳「努力」】 自分に与えられた仕事をやり抜くためには、強い意志が必要であることを理解し、努力してやり抜くことで、充実感や達成感を得ようとする意欲や態度を培う。	職場体験のビデオ	職場体験のビデオを視聴し、辛かったことややめたいと思ったことを思い出す。 自分の中の「続けよう」とする自分と「手を抜こう」とする自分をロールプレイする。 ロールプレイの感想を書く。	自分に与えられた仕事をやり抜くためには、強い意志が必要であることが理解できたか。 努力してやり通すことで、充実感や達成感を得ようとする意欲や態度が培われたか。
「心」向・「心」向	職場体験で漠然としていた将来に対する思いが現実味を帯びることを通して、目標に向かって夢や希望をもって自分自身を向上させようとする意欲や態度を育成する。	【事前道徳「義足のスプリンター」】 どのような状況においても、夢や希望を失わず、前向きに生きることの大切さを理解し、常に自分の可能性を信じて、やればできるという気持ちをもって、行動しようとする意欲を培う。	モーリス・グリーン(100メートル走世界記録保持者)の写真 平成12年度の小・中学生50メートル走の全国平均値 荒木孝司さんの写真とメッセージ(『今を生きる人々に学ぶ』明治図書・大江浩光・1999/4)	平成12年度の小・中学生50メートル走の全国平均値やモーリス・グリーンの写真から、「走る」ことに興味・関心をもつ。 荒木孝司さんの写真から、その人を知る。 怪我をした荒木さんが病院へ運ばれたときに、医者に言った言葉から、荒木さんの決断を知る。 荒木さんの義足について考える。 荒木さんの努力を知る。 荒木さんの希望をもって向上していこうとする姿勢から学ぶ。 荒木さんからのメッセージを読む。 本時の感想を書く。	どのような状況においても、夢や希望を失わず、前向きに生きることの大切さが理解できたか。 常に自分の可能性を信じて、やればできるという気持ちをもって行動する意欲が培われたか。
		【事後道徳「将来の夢」】 将来の夢をもち、それに向かって努力しようとするものの大切さを理解すると同時に、今の自分をしっかりと見つめ、自分のよいところを伸ばそうとする態度を培う。	職場体験後の感想文 将来の夢についての事前アンケート 『自分発見』シート	将来の夢の事前アンケートの結果を見る。 職場体験後の感想文を読み、今の自分を見つめることが自分を成長させることにつながり、将来の夢の実現に向けての第一歩であることを知る。 『自分発見』シートを作成する。 班で『自分発見』シートの発表をする。 本時の感想を書く。	将来の夢をもち、それに向かって努力しようとするものの大切さを理解することができたか。 今の自分をしっかりと見つめ、自分のよいところを伸ばそうとする意欲や態度が培われたか。

(19) 前掲 注4 pp.13~15

(20) 前掲 注4 p.32

(21) 七條正典「道徳教育指導のポイント」『中学教育2月号増刊'99 道徳教育の新機軸』小学館 1999 pp.161~162

学習プログラム作成参考書籍

- ・小沢昭巳『とべないホテル』ハート出版 1988
- ・小沢昭巳(作)吉田むねふみ(画)『とべないほたる』ハート出版 1997
- ・大鐘雅勝「とべないホテル」『子どもが本気になる道徳授業12選』明治図書 1991 pp.112~129
- ・「挨拶できなきゃ留年」毎日新聞 2001/5/2
- ・甲本卓司「オリックスブレイブス「イチロー」選手に学ぶ一流の生き方」『ヒーローから生き方を学ぶ道徳授業』明治図書 2000 pp.24~31
- ・大江浩光『今を生きる人々に学ぶ』明治図書 1999 pp.86~101
- ・『わたし・出会い・発見』大阪府同和教育研究協議会 1996 pp.58~59
- ・『わたし・出会い・発見 Part 2』大阪府同和教育研究協議会 1998 p.204

第3章 道徳の時間の実際

第1節 ユニット「勤労」

(1) 授業の実際

ここでは、職場体験と結びついた五つのユニットの中から、研究協力校で実践したユニット「勤労」の事前道徳と事後道徳の展開について述べていきたい。

事前道徳「仕事を選ぶとき」

この道徳の時間では、仕事をするものの意義をどのように捉えているのかということをも自分自身に問いかけて、価値観を明確にすることを主なねらいとした。

そのために、ランキング用紙(図3-1)を用い、将来仕事を選ぶときに重視する項目を考えるという学習をした。

まず授業の導入として、生徒にタウンページに

どのくらいの種類の職業が載っているかを予想させることから始めた。自分の将来の仕事について漠然としたイメージしかもっていない生徒に、現実味をもたせるためである。

そして、予想を超える多くの職業の中から仕事を選ぶことの大変さを感じた生徒に、ランキング用紙を配布し、どんな基準で仕事を選ぼうとするのか考えさせた。

図3 - 1 ランキング用紙

『仕事を選ぶとき...』(月 日)
 ()組()番()

将来仕事を選ぶとき、あなたが重視する項目を選んではってみよう。(番号は重視する順番です)

1

2 2

3 3 3

4 4

5

1を選んだ理由を書こう

5を選んだ理由を書こう

やりがいがある仕事	みんなが仲良く働ける仕事	自分の趣味や特技が生かせる仕事	休みが多い仕事	高い給料がもらえる仕事
時間や場所にしばられない自由な仕事	仕事の内容が楽な仕事	規模が大きい会社での仕事	世の中や人々の役に立つ仕事	

仕事を選ぶときの基準となる項目として、「やりがいのある仕事」「みんなが仲良く働ける仕事」「自分の趣味や特技が生かせる仕事」「休みが多い仕事」「高い給料がもらえる仕事」「時間や場所にしばられない自由な仕事」「仕事の内容が楽な仕事」「規模が大きい会社での仕事」「世の中や人々の役に立つ仕事」の九つの選択肢を設けた。

この九つの選択肢を、仕事を選ぶときに重視する順番に並べ替えるという作業を通して、自分の内面にある勤労に対する価値観を見つめ、明らかにしていった。その後、第一位と第五位に選んだ項目のそれぞれの理由をランキング用紙に書くことで、感性で受け止めた価値観を言葉を媒介として知的に整理した。

次に、それぞれの生徒のランキング用紙を班でもちより、ブレーストーミングにより班のランキングを完成させた。ブレーストーミングを行

うことで、生徒は、自分の価値観を他者に伝えるために論理的な思考をし、さらに、他者の価値観を知ることによって自分の価値観との間に葛藤が生じ、価値が深まることを期待したのである。また、一つにまとめられた班のランキングは、学級で発表することによって全体で共有した。

そして、価値観は人によって異なることを確認した後、最後に指導者から、これから実施される職場体験で働くことの意義を考えてくるように助言して授業のまとめとした。

職場体験

研究協力校における職場体験は、「体験学習を通して子どもたちに社会を見つめ、自らの生き方を考えさせたい」「地域・家庭・学校の輪を広げたい」という趣旨で、事前道徳の四日後の10月29日から10月31日の期間に実施された。協力してくださった事業所は105ヶ所にのぼった。323人の生徒は、1人から13人のグループに分かれ、できるだけ生徒の希望に沿う事業所で、基本的に三日間の体験をした。事業所での体験の内容は、そこで日々行われている仕事を職場の人と一緒にするというものであった。

そのため、実際の仕事を肌で感じ、仕事の厳しさや楽しさを実感することができると同時に、働く大人たちの仕事に取り組む前向きな姿勢を目にすることができた。そこでは、大人たちは仕事に対して喜びや楽しみ、誇りを感じながら働いていたのである。その様子に、事前道徳で確認した自分の価値観をもう一度振り返ろうとする意欲がわいてきていた。

事後道徳「仕事をするってどういうこと」

事前道徳を通して、「勤労」という価値に対する自分の考えを認識した生徒は、職場体験に臨み、新たな価値観に気付きながら価値を深めていったのである。

そして、それぞれの生徒が体験から得た価値を事後道徳によって学級で共有し、補充・深化・統合することでさらに知的理解を図り、内面化を促したのである。

まず、事後道徳の導入として、事前道徳でのランキングの結果を紹介した。他の人たちが「勤労」という価値をどのように捉えていたのかを知り、その時の自分の考えを想起させるためである。

次にビデオを視聴した。ビデオは、職場体験でお世話になった事業主のインタビューを再構成し、教材化したものである。自動車販売店・ホテル・菓子製造販売店・動物病院・スポーツ用品販売店の五つの事業所の方に「仕事をしていて、喜

びや楽しみを感じるのとはどんなときですか」というインタビューをし、それを教材として再構成したものを資料とした。

生徒は、自分たちの職場体験に関わってくださった事業主の話に親近感を抱き、インタビューの内容を自分の身近なこととして捉えることができた。つまり、自分たちが体験で実感した「勤労」という価値を道德の時間によみがえらせることができたのである。

次に、事前道德で行ったランキングを再度行うことで、「勤労」に対する自分の価値観を見つめ直す学習をした。事後道德のランキングに変化のあった生徒もなかった生徒も、その理由を考えることで、再び自己の内面と対峙し価値を深めていった。

最後に、「あなたは、将来、何のために仕事をしようと思いますか」という質問に対する答えを文章で綴っていくことを通して、思考が整理され、価値の知的理解が進み内面化が図られることをめざした。

(2) 分析と考察

ここでは、ユニット「勤労」の分析と考察を、生徒の授業中の様子や発言内容、ワークシートの記述内容、感想文から行っていきいたい。

なお、分析に当たっては、村田敏郎が明らかにしている勤労の三つの意義である【生計維持（収入を得て生活を維持する）】【自己実現（自己の適性・能力を発揮し、個性を生かす）】【社会貢献（社会に役立ち、発展に尽くす）】の視点を参考にすることにした。(22)

事前道德「仕事を選ぶとき」

学習の導入として、タウンページに載っている職業の種類が929種類あることを知った生徒は、まずその数に驚いた様子であった。将来、それらの仕事の中からどれかを選んでいかななくてはならないことを知り、仕事を選ぶということが現実味を帯びたようであった。

そこで、仕事を選ぶ時の基準をランキングするように指示された生徒は、戸惑いながらも自分の内面と対話しながら作業を進めていった。時折、近くにいる友達のランキングを覗き込みながら、自分の考えを整理していた。研究協力校の第二学年の生徒が第一位と第五位に選んだ項目のそれぞれの人数とその主な理由を表3-1と表3-2である。

また、ランキングの結果を円グラフで表したものが、図3-2と図3-3である。

表3-1 第一位に選んだ項目とその主な理由

項目と選んだ人数	主な理由
自分の趣味や特技が生かせる仕事 (126人)	<ul style="list-style-type: none"> ・趣味とかが生かせる仕事のほうが、やりがいがあるし、その分、がんばれると思ったから。 ・仕事は、アルバイトとかと違って、軽く変えられるものじゃないから、自分の好きなものなら一生続けると思うから選んだ。 ・自分のことが必要にされた方が嬉しい。 ・やっぱり、自分のやる仕事やから、自分の個性を生かせる仕事が一番だと思う。 ・自分の趣味が生かせるなら、楽しく仕事をできると思うし、特技が生かせるなら、集中してできると思うし、成長できると思うから。 ・自分の可能性を引き出したいから。 ・自分の特技を最大限に発揮した方がいいと思う。 ・基本的に自分に合う合わないかっていうのは、一番大切だと思う。 ・生かされた方が、今までやってきたことが無駄じゃないと思えるから。
やりがいがある仕事 (90人)	<ul style="list-style-type: none"> ・やりがいじゃなかったら、仕事続ける自信ないし、楽しくなかったらっていうか、やりたくない事したくない。 ・やりがいのない仕事なんてないとは思うけど、やりがいのない仕事したって、何のどくにもならへんし、おもしろくないと思う。 ・やりがいをもっていたら、自分に自信もてると思うから。やって毎日退屈しないと思うから。 ・自分のやりたいことなら、しんどくても我慢できるし、やりとげたときの嬉しさが違う。 ・やりがいのある仕事やったら、自分が納得して仕事ができるし、何でも一生懸命したいから、やりがいのある仕事がいい。 ・内容は何でも、やりがいとか、終わった後に達成感がある方がいい。 ・やりがいがあるということは、自分が満足している証拠やと思う。 ・やりがいのある仕事が一番自分の中で役に立つと思う。やりがいがある仕事こそ、やって意味のある仕事だと自分の中でそう感じるから。 ・自分が本当にやりたいと思ったら、どれでもやりがいがあると思うから。やりがいがある仕事だから、がんばってできると思う。
高い給料がもらえる仕事 (39人)	<ul style="list-style-type: none"> ・お金いっぱいもらわないと、働いている意味がないから。 ・給料をもらうために働いているから。 ・生活をしていくには、やっぱりお金がないといけないから。 ・お金をためて、やりたいことがあるし、その夢をかなえるため。
みんな仲良く働ける仕事 (16人)	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめがあったらいややから。 ・やっぱり、コミュニケーションは大切だと思う。 ・みんなが仲良く働けたら、苦しい仕事や厳しい仕事もできると思うから。 ・仕事とかは関係なしに、やっぱり人間関係がいい方が、働きやすいし、楽しいと思うから。
世の中や人々の役に立つ仕事 (9人)	<ul style="list-style-type: none"> ・意味のない仕事はやりたくないから。 ・世の中や人々の役に立つ仕事は、かっこいいな一と思ったから。 ・お金とかに関係なく、人々の役に立つということが大切と思うから。
時間や場所にしばられない自由な仕事 (7人)	<ul style="list-style-type: none"> ・自由に生きたい。 ・堅苦しいのは嫌い。 ・自分がしばられるのは嫌いやし。
仕事の内容が楽な仕事 (7人)	<ul style="list-style-type: none"> ・楽にこしたことはないから。 ・あんまり仕事しなくてもいいし。 ・なるべく楽に働いて、お金がかげたらいいから。

休みが多い仕事（3人）	・疲れやストレスがたまっているし、休みが多いと疲れが癒されるから。 ・仕事ばかりだとしんどいから。
規模が大きい会社での仕事（2人）	・一番大きい会社で働きたいから。 ・あんまりリストラとかなさそうやし、将来は安心できそうやから。

	やだから。 ・私はお金が嫌いだから。
自分の趣味や特技が生かせる仕事（5人）	・そんなに、自分の特技が生かせる仕事はあまりない。 ・趣味や特技がないから。
みんな仲良く働ける仕事（3人）	・仲良くしたら、仕事に負担がかかる。仲良くなりすぎたら、仕事がかどらない。 ・自分がよければ、仲良くしなくても働けるからいい。
やりがいがある仕事（1人）	・やりがいがないでも、自分の好きな仕事ができたらいいと思ったから。

図3-2 第一位に選んだ項目

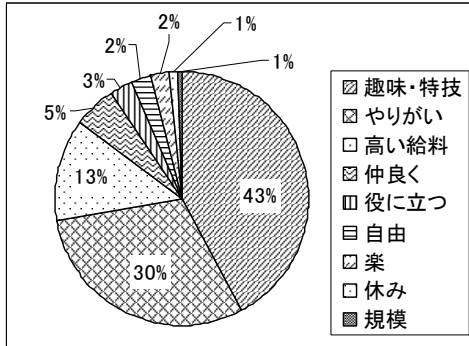
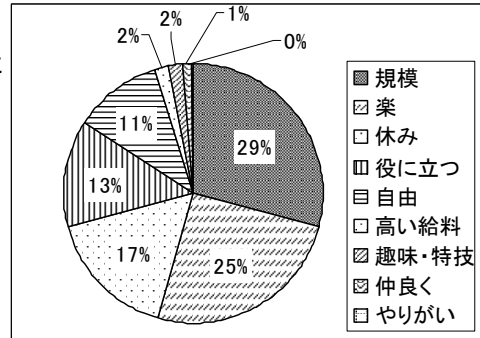


表3-2 第五位に選んだ項目とその主な理由

項目と選んだ人数	主な理由
規模が大きい会社での仕事(86人)	・会社にしばられている気がしていや。 ・別に会社が大きくななくても、仕事はできると思う。 ・小さくても、やりたいことがやればい。 ・リストラ多そうだから。 ・自分たちの力で大きくすればいい。責任感があるっていい。 ・大きかったら、競争とかあっていや。はらはらする仕事はいや。 ・規模の大小よりも、仕事の内容が大切だから。
仕事の内容が楽な仕事(75人)	・自分が好きなことできたら、別に少しくらい大変でもいいかなと思ったから。 ・楽じゃなくても、一生懸命がんばって働きたい。 ・内容が楽なものを選んだって、他人と比べれば、きっと忙しい仕事のほうが充実している、やりがいがあると思うから。 ・やったあとに、「しんどかったけどやってよかった」と思えるようなことがしたいから、別に楽じゃなくてもいい。 ・やっぱり、難しい仕事をやりとげたら、自分の自信にもなるし、楽な仕事は自分の気持ちの面で、憂鬱な感じだったから。
休みが多い仕事(49人)	・休みが多いと、つまらなさそう。 ・楽しい仕事ができるんやったら、休みはいらん。 ・休みが多いと、必要とされてないみたいでいや。 ・休みが少ないほうが、がんばっているという感じがやし。 ・休みが多かったら、人々のために何もできないと思うし、いつまでたっても何もできないから。 ・休みばかりな仕事だったら、すぐにだるくなって、仕事があっても仕事にならないと思う。
世の中や人々の役に立つ仕事(39人)	・別に、世の中の役に立ちたくないから。 ・働いていれば、結果的に世の中の役に立っていると思うから。 ・まずは、自分のやりたいことをやって、人のためはそれから。 ・人のことやってたら自分がしんどい。
時間にしばられない自由な仕事(33人)	・こんなん気にしてたら、仕事じゃないみたいでいや。 ・時間や場所がしばられても、やりたい仕事ができたらいいから。 ・時間を守らなければ、ダラダラしてしまうから。 ・仕事なのだからしょうがないと思う。
高い給料がもらえる仕事(5人)	・給料が高くて、自分が好きじゃないことやってても楽しくないから。 ・なんぼ高くても、仕事がつまらなそうやから。

図3-3 第五位に選んだ項目



これらの結果を見ると、第一位に選んだ項目のうち、「自分の趣味や特技が生かせる仕事」「やりがいがある仕事」を合わせると、この2項目で全体の7割以上を占めている。また、これらの項目を選んだ理由を見ると、「趣味とかが生かせる仕事のほうが、やりがいがあるし、その分、がんばれると思ったから」「自分のことが必要とされた方がうれしい」「自分の可能性を引き出したいから」などと【自己実現】に向けての前向きな理由である。多くの生徒が「勤労」という価値を【自己実現】の視点と関連させて捉えていることが分かる。

また、第一位に三番目に多く選ばれた項目は「高い給料がもらえる仕事」である。これは、自分の将来を現実問題としてみたとき、給料の高い低い、生活するうえで欠かすことのできない条件であると捉えていると思われ、勤労の意義の一つである【生計維持】を意識していると考えられる。

また、第五位に選んだ項目については、「規模が大きい会社での仕事」「仕事の内容が楽な仕事」「休みが多い仕事」の3項目で全体の7割を超えている。そして、その理由として「小さくてもやりたいことがやればい」「楽じゃなくても、一生懸命がんばって働きたい」「楽しい仕事ができるんやったら、休みはいらん」といった、自分の生きがいややりがいを感じることを優先させるといった傾向が見受けられた。

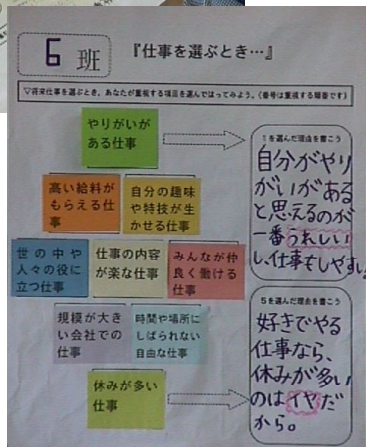
このランキングの結果から、多くの生徒が勤労の意義を【自己実現】や【生計維持】の視点から

捉えていることが伺えた。

この一人一人のランキング用紙を班でもち寄り、ブレーストーミングによって班のランキングを作成した。ブレーストーミングでは、生徒は活発な意見交換をしていた。自分と同じ意見には、その通りだと共感し、違う意見に対しては、そんな意見もあるのかと驚き、それぞれの価値観が異なることを実感していた。写真 は、班での話し合いの様子である。班で一つのランキングを



写真
班でランキングする様子



作ることが重要なのではなく、そこにいたるまでの意見交換に意義がある活動であった。

この活動を通し、生徒は様々な価値観があることを理解し、今から行われる『生き方探究・チャレンジ体験』という職場体験で勤労の意義を考えてこようとする意欲をもったようであった。それが授業後の感想文の中に多く見られた。

事前道德の感想文より

A さまざまな価値観があることに気付いたもの

自分の考えと違う人が結構いた。人それぞれにいろんな考えがあるんだなと思った。

周りの人は自分と全然考え方が違うし、中には一緒の人もいた。でも、いろんな考えがあるから、世の中は成り立っていると思った。

B 自分の価値観を見つめることができたもの

今日こういうふうには、ランキングすることによって、少し自分が何を考えているのかが分かったような気がする。

改めて、自分の仕事に対する気持ちが変わった。

今まで、こんなこと考えたことはあまりなかったと思う。自分が何の仕事をやりたいか、こういう条件をつけて順位を決めるとわかりやすいなと思った。

C 『生き方探究・チャレンジ体験』に向けての意識が向上したもの

私も十年後には働かなくてはならないけれど、「生きチャレ」

で学んだことや、体験したことを通じてしっかりとやっていきたいと思う。そのためにも、火曜日から始まる「生きチャレ」に力を入れていきたいと思った。

今は、やりがいがある仕事が一番だけど、「生きチャレ」に行くと、何で仕事を選ぶべきかを学びたいと思った。

来週は「生きチャレ」があるけど、自分がやりがいがあるなあと思う仕事につきたいし。私は将来、看護師になりたいけど、今日学習したような自分がやりがいを感じる仕事なのか「生きチャレ」で体験したいと思う。

職場体験の様子

職場体験『生き方探究・チャレンジ体験』で生徒は、短い期間ではあるが職場の人と接しながら実際に仕事を体験した。職場体験の感想文では、先に述べた勤労の三つの意義にまで踏み込んだものはなかったが、勤労の厳しさや喜びをしっかりと肌で感じ取ってきていることが読み取れた。この実感が事後道德で勤労の意義を再考する上で、大切であったと思われる。その様子を感想文の中から紹介する。

ケーキ屋という一見華やかそうな仕事だけど、実際にやってみて、ずっと立ちっぱなしで思っていたより結構疲れて、大変だということがよく分かった。

私は、この三日間で仕事の大変さ、やりがい、楽しさなどたくさんを知りました。

やっぱり、仕事というのは、簡単でないことが分かりました。自分のやるべきことを、しっかりと最後までやるのが大切だと思いました。

思っていた以上に、難しくしてしんどいところもあったけど、そのぶん、こっちにもやりがいがあって、とても充実していました。

私は、いろいろな仕事があって、そのすべての職業に大変さと喜びがあるのだと知った。

事後道德「仕事をするってどういうこと」

導入として事前道德でのランキングの結果を聞き、生徒は他の人の価値観を知ったり、その時の自分の「勤労」に対する価値観を思い出したりした。その後「仕事をしていて、楽しみや喜びを感じるのはどんなときですか」という事業主へのインタビューのビデオを視聴した生徒は、自分たちの職場体験に直接関わってくださった方の回答に興味を示し共感している様子であった。

五人の事業主の回答は、それぞれの職業を反映したもので、自動車販売店では車の契約が取れたときはもちろんであるが、購入した客から「ありがとう」の言葉が聞けたときに特に喜びを感じるという内容であった。また、ホテルでは、自分たちのサービスに対して客から喜びの声や「また来たい」という言葉を聞いたときに充実感を感じるというものであり、菓子製造販売店では自分の製造したものを買ってもらったときに喜びを感じたり、今まで自分が出来なかった技術ができるようになることに対して達成感をもったりすると

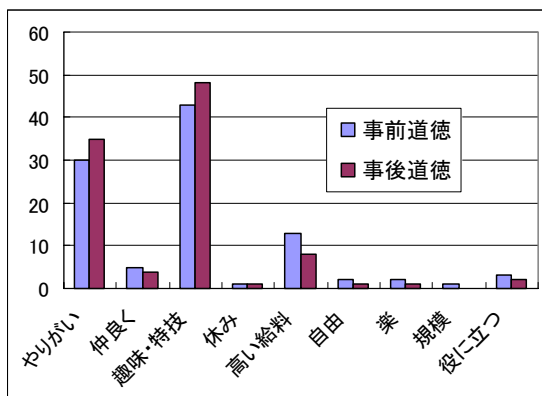
写真 事業主のインタビューのビデオを見る生徒



いうことであった。動物病院では、来院した動物が元気な姿で帰っていくときに仕事に対してやりがいを感じ、スポーツ用品販売店では、いろいろな人との出会いがあることや、自分の趣味を仕事に生かしていることが楽しいという内容であった。このインタビューと、自分が関わった事業所の人たちの様子を重ね合わせながら、再び自分の勤労に対する価値観を振り返っていた様子であった。

その後、再度ランキングをやってみると、体験で実感した価値や事業主へのインタビューを視聴したことで自覚した価値を踏まえて、再び自己の内面での対話が促され、仕事を選ぶ基準の順位を替える生徒も多数いた。事前道德と事後道德の第一位に選んだ項目の比較を表したものが図3-4である。

図3-4 事前道德と事後道德で第一位に選んだ項目の比較



この比較からも分かるように、「やりがい」「趣味・特技」の項目で事後道德のほうが数字が高くなっている。「やりがい」や「趣味・特技」という価値は、先に述べた【生計維持】【自己実現】【社会貢献】の三つの価値のうち【自己実現】と深く

関わっており、生徒は、職場体験を通じて事前道德の時点よりも、さらに、【自己実現】という視点で勤労の意義を自覚したようであった。

また、事前道德ではあまり触られることなかった【社会貢献】の意義については、事後道德のほうが数字は低くなっているものの、「働くということ自体が社会に何らかの形で役に立っていることだと思う」という内容の意見が授業の最後の作文に多数見受けられ、社会での勤労の意義について自覚し始めていることが読み取れた。

ある生徒M君は事前道德でのランキングでは、仕事を選ぶときの一番重要な項目として「高い給料がもらえる仕事」を選んでいった。その理由として「不景気の今、給料が高くては。やりがい、自分の趣味・特技なんてどうでもいい。仕事につけて、金がもらえたらOK。」と書いていた。その後の班での話し合いでも、自分のこの意見を貫き通し、他の班員の意見を押し切って、「高い給料がもらえる仕事」を班の第一位にしていた。M君は、その後保育園に職場体験に行き、事後道德でのランキングでは事前道德では第四位にしていた「世の中や人々の役に立つ仕事」を第一位にしている。その変更理由では「『生きチャレ』行って、人々の役に立つ仕事っていいよな...っておもって、給料より人々の役に立つ仕事を選んだ」と書いている。

M君の内面で、事前道德の時点で主に【生計維持】の視点で捉えていた勤労の意義に、事後道德では【社会貢献】の視点が加えられたことが読み取れる。

また、作文の中で次のようなことも書いている。

僕は将来、この道德でやったような仕事ができるかどうかはわからないけど、でも、理想に近い仕事ができるように、日々努力することが大事だと思った。もし、理想の仕事ができなくても努力した分は、何かの役に立つから。

この作文からは、事前道德・職場体験・事後道德を経て内面化された価値が、日常生活における努力することへの意欲と結びつき、道德的実践力を身につけることの重要性を自覚しつつあることが読み取れる。

最後に授業のまとめとして、「あなたは、将来、何のために仕事をしようと思いますか」という作文を書いた。文章にすることで自分の考えを整理し、価値の知的理解を促したのである。その作文の中には勤労の意義である三つの視点が読み取れるものも多くあった。いくつか紹介する。

高い給料をもらいたいと思うのは、結局は自分が給料をもらったときに「ああ、やってよかった」という生きがいをもちたいから。そういうことを考えたら、仕事というのは自分のためにやっているのじゃないかと今日の道德の時間に思いました。

どんな仕事でも、絶対誰かの役に立っているんだろうなと思った。こういうことを考えながら嫌な仕事でもやると、きっとがんばれるのだろうと思った。自分のやりたい仕事をして一生懸命やらなければやりがいないんじゃないだろうなと思った。本当にやりたいことをしなければ、後で後悔したりするんだろうなと思った。

たくさん働いて、しんどい思いをして、そしてお客さんによるこんでもらえたとき、本当の仕事の良さを実感できるんだと思った。人の役に立つ仕事はそんなに大切じゃないと思っていたけど、「生きチャレ」で人の役に立つことの良さを知った。人に感謝されるのはとても難しいことだけど、その分やりがいがあると思う。

仕事は大変だし、嫌になることもあると思うけど、仕事を終わった後に、自分が自分がんばったなと思えることはすごくいいことだと思います。将来、何のために仕事をしようと思うかというと、自分の仕事で人の役に立っている仕事だと思います。でも、仕事は自分のためにするのだと思います。生きていくためだけでなく、それによって、生きがいを得られると思うからです。

自分のために。自分が生きていくための仕事やし、その仕事を通して何かを見つけることができるかもしれない。人間として成長できるかもしれない。

将来、何のために仕事をするのか、そこらへんはまだわかりません。でも、将来する仕事に誇りをもてる仕事をしたいと思う。自分だけじゃなくて、きちんと相手のことも考えないと仕事は成り立たないと思う。自分と相手のコミュニケーションはとても大切だと、今日の授業で分かった気がします。仕事をすることは、今の時間を大切に、将来のために役立つものだった。でも、仕事とは、つらいことや悲しいこと、いいことがあります。そんなことを乗り越えていけば、大人に少し近づくとおもいます。

やっぱり、自分のためというのものもあるやろうけど、自分のためだけではやっていけないと思う。仕事をして人々に感謝されるというのが、仕事をしている中で一番嬉しいことのように思える。でも、人のためだけに仕事をするのは、ちょっと今の僕ではできないと思うし、自分と周りの人々のために仕事をしようと思う。

これらの分析からユニットを通し、生徒は勤労の価値を【生計維持】【自己実現】【社会貢献】の視点から自覚し、深めていったことが明らかになった。さらに、「生き方」を探究することをねらいとした職場体験と道徳の時間を結びつけた結果、日常生活との関わりの中で価値を捉えることができ、自覚した価値を自分の「生き方」に反映させようとする意欲を抱いていることも読み取れた。道徳的実践力の育成が促されたと思われる。

第2節 ユニット「思いやり・感謝」

(1) 授業の実際

第1節に引き続き、第2節ではユニット「思いやり・感謝」の展開について説明したいと思う。

事前道徳「とべないホタル」

この道徳の時間では、「思いやり・感謝」の価値のうち、主に、「思いやり」の価値を深めることをねらいとした。本当の優しさとは何なのかを資料を通して知り、思いやりのある行為とはどのよう

な行為なのかを考えたのである。

資料として活用した『とべないホタル』は児童文学として広く知られている。生徒の中には、すでに話の内容を知っている生徒がいることは予想できたが、あえてこの資料を使った。それだけ、この作品自体に力があり、授業の展開次第で、生徒は新たな価値の気付きをすることができる考えたからである。

話は、羽がちぢれて飛べないホタルのことを気づかい、相手の立場に立って思いやりのある態度で見守ろうとするホタルや、とべないホタルのために自分を犠牲にするホタルの姿を通し、とべないホタルが生きる勇気を与えられるという話である。

この話を六つの場面に分けて、次の場面の展開を予想しながら、場面を追って順次読み進めていった。その際には、次の展開がイメージしやすいように、コピーした絵本『とべないホタル』の挿絵(写真)を黒板に貼り付けていった。



写真
場面絵を示しながらそれぞれの場面を読み進める様子



そして、最後に『とべないホタル』の感想文を書いてまとめとした。話の展開を予想する時には、指導者の思いは生徒には伝えず、生徒の自由な発想を尊重するようにした。自分たちの考えている思いやりのある行為と、仲間のホタルたちの行為との間には隔たりがあり、生徒に、本当の優しさや思いやりのある行為を考えさせるためである。このようにして、生徒は話の流れを追いながら、自分が今までもっていた優しさや思いやりという価値について内面に対話し、価値を深めていったのである。

職場体験

生徒は、事前道徳で、優しさや思いやりという価値についての自覚を深め、その12日後に職場体験を実施した。職場体験に参加する生徒は、少な

から緊張をしていた。自分の興味のある職業ではあるものの、知らない職場での初めて出会う人との関わりは生徒に不安感を与えていた。しかし、そのような状況だからこそ、そこでの思いやりのある行為を深く心にとどめることになり、今までに味わったことのない感謝の気持ちを抱いたのである。

事後道徳「礼状を書こう」

この時間では、事前道徳・体験を通じて深まった「思いやり・感謝」という価値を補充・深化・統合することで、内面化を促し、感謝の気持ちを相手に伝えるために、心をこめて「礼状」を書こうとする意欲や態度を育成することを主なねらいとした。実際の「礼状」は、五限目のこの道徳の時間を受けて、六限目の総合的な学習の時間で取り組まれた。

まず、四つの事業所に体験に行った生徒の初日と最終日の生徒の様子を撮影したものを再構成し、教材化したビデオを視聴した。初日は緊張や不安が表れていて仕事に慣れない生徒の様子、最終日には、リラックスして楽しそうに仕事をしている生徒の様子を撮影のポイントとし、それを教材として再構成した。

そのビデオを視聴した後、初日と最終日ではどのような違いがあるのかを考えた。そして、その違いは、自分たちも体験してきたということを確認した後、それを生んだのは、事業所の方たちのどのような言葉かけや、態度だったのかを思い出した。そうすることで、その時の自分の気持ちを思い出し、価値が深まることを促したのである。

さらに、職場体験の生徒感想文の中から、「思いやり・感謝」の価値がしっかりと表現されているものを資料として音読し、ビデオ視聴で感性的に理解していた価値を文字によって知的理解へと発展させたのである。

資料 「生き方探究・チャレンジ体験」を終えて

ほんの一瞬、考えがたいほど短かった三日間、あの楽しかった三日間を振り返りながらこの文章を書いています。この文章を書くのは、難しくありません。簡単です。それほどいい思い出ができました。

この体験で、僕は「人の優しさ」というものを感じました。活動をやっているのは僕たち自身です。が、準備も活動内容もすべて事務所の方々のおかげで成り立っていた、ということを感じます。そして、何事も必死で教えてください。僕たちに「いい思い出作って帰ってや」と訴えかけておられるような気がしました。「それほどまで気を使わなくてもいいのに」と思うほど気を使ってくださいました。あのかきの豚汁、おいしかったです。職員のみなさん、心からありがとうございました。

次に、一番に残った活動は、感謝表明です。改札口で乗降さ

れるお客様に、「ありがとうございます」と声を張ってお礼を言う活動です。僕は、恥ずかしくて最初は声を張らず、声を出していません。すると、中年男性のお客様が「なんでこんなやってんの」と、横にいた職員の辻井さんに質問されました。辻井さんは『生きチャレ』のことを一通り説明したあと、「今のうちに全く他人の方にお礼を言う練習をしておけば、社会に出たとき心からありがとうございます、と言えらると思うのです。」とお客様に説明されました。その説明が心につきさりました。「ここまで考えて下さっているのに」。僕はホームまで届くくらいの大声でめいっぱい挨拶をしました。職員の方々、心からありがとう。

そして最後に、次時にある総合的な学習の時間で「礼状」を書くときに、今の気持ちを忘れずに心をこめて書くようにという指導者からのメッセージでまとめとした。

(2) 分析と考察

ここでは、ユニット「思いやり・感謝」での生徒の授業中の様子や発言内容、ワークシートの記述内容、感想文から分析と考察を行っていきたい。

分析は、「思いやり」という行為は主観的判断で捉えるのではなく、相手の立場に立って捉えることであるという視点と、その思いやりのある行為に対して感謝の気持ちを持ち、相手にその気持ちを伝えようとするという視点から行うことにした。

事前道徳「とべないホタル」

「とべないホタル」の内容を六つの場面に分けて、場面ごとに読み進めながら、次の場面の展開を考えていくという流れに、生徒は興味を示していた。次の展開を考えても、話の内容とは異なることが多く、その展開に驚くと同時に、そういう考え方もあるのかと新たな気づきをしていた。

たとえば、場面2は、「とべない自分に腹立たしさを感じ、周りに当り散らすホタルの様子を見ていた他のホタルたちが、とべないホタルのもとを一匹、二匹と去っていく。そして、ついには仲間のホタルがいなくなる。」という内容である。この内容を受けて、生徒に「他のホタルたちは、そのとき、どこでどうしていたと思いますか」という質問をした。

すると、「とべないホタルに気がつかってどこかへ行ってしまった」「葉を捜しに行った」などの仲間のホタルたちの行動を好意的に考えようとする生徒もいれば、「とべないホタルのことを見捨てた」「他の場所に遊びにいった」などのように、否定的に捉える生徒もいた。しかし、次の場面3を読み進めると、実際には、仲間のホタルたちはひっそりとツユクサの葉のうらにかくれて、とべないホタルのことをじっと考えていたことがわか

自分たちの日常生活と比べている生徒もいた。

一方、ホタルを捕まえにきた子どもと、身代わりになって捕まえられたホタルとの関係にも心をひかれていた。足が悪くてベッドで寝ている子どもと、羽がちぢれてとべないホタルを重ね合わせると同時に、足の悪い子どもを思いやり、ホタルを取りに来た子どもの行為と、とべないホタルを思いやって、身代わりになったホタルの行為とを重ね合わせても

【場面2】
ホタルの子どもたちは、だれもがあの赤いえりのついたつやつやの黒い羽と、だいいな電灯をもって生まれてきました。
しかし、どうしたことが、ただ一びき、そのホタルだけは、やけどをしたように黒い羽が、ジジッとちぢんでいるではありませんか。六本の足も、だいいな電灯もちゃんともっているのに、ただ、羽だけがみにくくちぢみまくれているのです。
ホタルたちは、あまりのいたいたしさに、ことばが出なくて、ただ、だまつて見つめているだけでした。
とべないホタルは、そのちぢんだ羽をプルプルとふるわせて、とびたとうとしましたが、五センチくらいからだがうくと、もう、ポトッと落ちてしまっ

「こんどこそ。」
「と思つて、とべないホタルは、うんと羽に力をいれ——首をぐっと上にはし——足をがっしりふんで——
ああ、でも、やっぱりだめでした。
「羽をもつと、ピンとはってこらん。」
と思わず、見ていたホタルの一びきがいました。
ほかのホタルたちも、口々にいいました。
「うん、おなかにぐっと力を入れてっ。」
「ほら、そこで足をひっこめて。」
でも、やっぱりだめでした。
とべないホタルは、くやしくて、あたりをメチャメチャに歩きまわり、小石にからだをぶつけました。でも、見ているホタルたちはどうすることもできません。
そのうちに、見ていたホタルの一びきが、そつとどこかへ立ち去ってしまいました。
続いて、二ひき去り、三ひき去り、しまいにみんないなくなってしまうました。
とべないホタルも、つかはれて、石の上にすわってほんやり空を見つめていました。
どこかで、こんな声がありました。
「今夜は、ちっともホタルがいらないなあ、どうしたんだろう。」
ホタルとりのきた子どもたちの声でした。

る。とべないホタルのことを気づかしながら、あえて慰めの優しい言葉をかけたりするのではなく、自分のことのように、じっと心配するその姿に、相手の立場に立って考えることが大切であるという本当の優しさを感じた様子であった。このように、次の場面の展開を予想しながら、読み進めた後、最後に感想文を書いた。生徒の感想文には、いくつかのキーワードがあった。「優しさ」「勇氣」「友情」「仲間」「犠牲」である。このキーワードの中で「優しさ」については、多くの生徒が感想文の中で触れていた。前述したように、表面的になにもしてやらないことが実はホタルの立場に立った優しさであったことに気づき「なにもしないことも優しさなんだ」と感想文に書いている生徒もいた。また、とべないホタルが人間の子どもに捕まえられそうになったとき、自分が「犠牲」となったホタルの行為に対しても「優しさ」を感じていた。そこでは、「勇氣」と「優しさ」が表裏一体の関係であることに気付いているものも多数あった。

そして、「仲間」に支えられて、とべないホタルがとべないことを気にしなくなったことにおいては、「仲間」「友情」という価値の気づきをしていた。これが物語の世界だけでなく、自分たちの生活の中でも実現することを望む声も多くあった。人は、一人では生きていけないことを感じている生徒や、他と違うことを気にしたり、そのことを相手への中傷としてあらわしたりすることの多い

いた。一匹のホタルをめぐって、捕まえる側と捕まえられる側ではあるものの、どちらの行為も自分の主観的な判断から行ったものではなく、相手の立場を考えての行為であったことに感動していた。そして、その足の悪い子どものために、逃げることもしないで精一杯飛んでみせるホタルに対しても心を動かされていた。

生徒の感想文の中から、いくつかを紹介する。

勇氣というのは、優しさなんだと思った。このつかまえに来た子どもたちも、友だちにホタルを見せるためにきたのだから、子どもたちがやったことも優しさなんだと思った。やさしさと優しさがうまれるなんてすごいと思った。

私は、最後にとべないホタルを助けたホタルが捕まったとき、他のホタルがとべないホタルを責めるのではなく、「僕が先にとびだそうと思っていたのに」とか「私もよ」と言えるところがすごいなあと思ったし、最初にとべないホタルを見つけたときに、一匹、二匹と去っていったとき、見捨てたと思ったけど、実はみんなとべないホタルのことを考えていたっていうことが、とても優しいなと思った。

本当の優しさっていうのは、ただ単にかわいそうとか思うだけじゃなくて、遠くからでもいいから見守ることなのかなと思いました。

とべないホタルのために、とべるホタルたちが、自分たちは何をしてあげられるかを考えて、実際にとべないホタルを見守ったことがすごいと思った。それに、自分の身を犠牲にして守った優しさはすごい。頭で分かっているけど、なかなか行動するのは難しいのに、守るためなら、恐さなんか平気だという強さ、ほんとにすごいと思った。

ホタルの目の前で、ずっとみんなで相談したりしてたら、嬉しいやろうけど、だんだんそのホタルは、みんなが自分のためにそこまで考えてくれて悪いな—とったり、何か、惨めになったり

する。上辺だけじゃなくて、心の底までちゃんととべないホタルのことを考えていた。本当の優しさっていうのは、相手の心のことまでしっかりわかってそれを考えることやと思った。

男の子が思った兄弟に対する優しさは、ホタルにとっては、仲間をとられることになってしまった。こんなふうに、自分の相手に対する優しさが、他の人を傷つけてしまうことがあるのかなって思う。一人一人優しさの表現の仕方は違うし、あえて厳しくすることが、その人のためっていう優しさもある。

この道徳の時間を通し、思いやりという価値を主観的判断からの視点で捉えるのではなく、相手がどう思うのかという相手の立場に立つという視点で捉えたという面での価値の深まりがあったと思われた。

職場体験の様子

事前道徳で、本当のやさしさとは何か、思いやりのある行為とは何かということについての価値を深めた生徒は、緊張と不安で訪れた職場で「思いやり」だけでなく、「感謝」という価値の自覚も深めていた。その様子を職場体験の感想文の中から紹介する。

いろんな経験をさせていただいたけど、一番心に残っているのは事業所の方の優しさです。普通は、自分の仕事をするので精一杯なのに、わからないところをちゃんと教えてくださったりしてすごく嬉しかったし、仕事って楽しいなあと思いました。

僕は、事業所に行って一番最初に思ったことは、事業所の人たちがやさしくて、おもしろい人ばかりだと思った。事業所の人たちがやさしかったから、やる気も出てくるし、いいところだと思った。

間違えたときもありましたが、職場の人たちはいつも笑顔ですべて教えてくれました。

事後道徳「礼状を書こう」

職場体験で周りの人たちからの思いやりを感じた生徒が、その時の自分のことを想起するために、事後道徳では、まず、職場体験を教材化したビデオを視聴することから始まった。初日と最終日の生徒の様子をその変化に注目しながら視聴するように指示された生徒は、興味深げにビデオを見ていた。自分たちの仲間が映っている映像に、自分の職場体験を重ね合わせていた。そして、初日の不安や緊張から最終日に仕事することに喜びを感じていく気持ちを思い出していた。

ビデオを視聴した後、初日と最終日の様子の違いを尋ねると、「初日は行動がぎこちない。とても緊張している」「最終日は、慣れてきている。仕事のペースが早くなっている。事業所の方からあだ名で呼ばれて親しくなっている。」などと、答えていた。

また、自分の職場体験を思い出してみても、事業所の方たちのどんな言葉かけや、態度に緊張がほぐれたかを尋ねたところ、「失敗したときに、気にしないでいいと言ってくれた」「分からないとき

写真
教材化したビデオを視聴する生徒の様子



に、丁寧に教えてくれた」「仕事をほめてくれた」「がんばってと励ましてくれた」「いろいろなことを教えてくれた」「仕事以外のことで話かけてくれた」「ありがとうと言ってくれた」「お疲れ様と言ってくれた」「笑顔で接してくれた」などと答えていた。職場の人たちが仕事があるにも関わらず、慣れなくて戸惑っているであろう自分たちの立場に立って、思いやりのある言葉かけや態度を示してくれたことに「思いやり」の価値を深めていた。

そして、そのような言葉かけや態度に対してどのように思ったかを尋ねると、緊張がほぐれ、仕事にやる気をもつことができ、大変感謝しているという意見がほとんどであり、思いやりのある行為に対して感謝の気持ちを抱いていた。

最後に、職場体験の感想文を読むことで、それまで感性的に受け止めていた思いが自分の中で整理され、文字を通して知的に理解され、さらに「思いやり・感謝」という価値の自覚が深まっていったようであった。そして、事業所の方たちに心を込めて礼状を書こうという意欲がわいてきているようであった。

この時間を通し、思いやりのある行為に対して感謝の気持ちをもち、その気持ちを相手に伝えることの大切さを実感するという視点での価値の深まりが見受けられたと思われる。道徳の時間の後に引き続き行われた総合的な学習の時間で取り組まれた礼状に道徳の時間での価値の深まりが反映されていた。

礼状は、生徒にとっては堅苦しい形式ではあったが、その決められた枠の中で、それぞれの生徒が自分の感動したことや、勉強になったと感じたことを取り上げ、事業所の方たちに対して心から感謝の気持ちをもっていることを精一杯伝えようとしている姿が読み取れる。礼状の中から二つを紹介する。

ユニット「勤労」

Aさんは、事前道德の「仕事を選ぶとき」でのランキングでは、やりがいのある仕事を第一位に、休みが多い仕事を第五位に選んでいる。第一位の理由は、「やりがいのある仕事じゃないと、自分がやる気になれないから」としている。第五位の理由は「好きでやる仕事なら、休みが多いのはいやだから」である。また、この時間の終わりに書いた感想文には、「来週は『生きチャレ』があるけど、自分がやりがいがあるなあと思う仕事につきたいし。私は将来、看護師になりたいけど、今日学習したような自分がやりがいがあると思える仕事なのか『生きチャレ』で体験したいと思う。」と書いている。

このことから事前道德で、Aさんが勤労の意義を「やりがい」の視点で捉えていることを確認した後、その価値観が正しいのかどうかを職場体験で実感してこようとしているのが読み取れる【視点1】。

この後、病院に職場体験に行ったAさんは、ここでの感想を次のように書いている。その一部を紹介する。

「生きチャレ」で学んだこと

(略)すごくいい経験ができて、すごくうれしかったです。

また、いろんなことを教えてくださった病院の方には感謝しています。

この「生きチャレ」で、相手の立場になって物事を考えるということを学んだので、これからも、この経験を生かしていければいいと思いました。

この感想文を読むと、事前道德で勤労の意義を「やりがい」の視点で捉えていたAさんが職場体験でそれを実感していることが読み取れる【視点2】。さらに、職場体験を通して「相手の立場に立って物事を考える」という価値にも気付いている。そして、これからの日常生活に深まった価値を生かそうとする意欲も表現されている【視点4】。

この勤労に対する価値の自覚をさらに事後道德で深めた結果、ランキングの第一位を「自分の趣味や特技が生かせる仕事」に変更している。その理由として「『生きチャレ』を体験して、自分の趣味や特技が生かせる仕事ややりがいのある仕事を選んだほうが、仕事が長続きしたり、自分が楽しく働けたりするんじゃないかと思ったから」と書いている【視点3】。

そして、将来何のために仕事をしようと思いませんかという質問に対しては、体験を教材化したビデオを見て、自分の職場体験を想起したAさん【視点3】は「『生きチャレ』で仕事をして、患者さんと触れ合ったり、お医者さんと話をしたりして、

拝啓 向寒のころとなりましたが、みなさまには、お変わりありませんか。私は、元気に過ごしています。

さて、先日は生き方探究チャレンジ体験で、大変お世話になりました。ありがとうございました。たくさん迷惑をおかけしましたが、優しく接していただき、とてもうれしかったです。たくさん迷惑をおかけしましたが、優しく接していただき、とてもうれしかったです。

成功したら、ほめていただき、失敗してもやさしく教えてくださって、すごく自信につながりました。店のケーキは最高においしかったです。本当にありがとうございました。

みなさまの健康をお祈り申し上げます。まずはお礼まで。

敬具

拝啓 向寒のころとなりましたが、みなさまはいかがお過ごしですか。僕は、毎日楽しい学校生活を送っています。

さて、先日はお忙しい中、生き方探究チャレンジ体験に協力していただき、ありがとうございました。おかげさまで、運送業とは、どういう職業か分かりました。

特に心に残ったことは、事業所の方々のやさしさです。

僕が重い荷物を持っていると、事業所の方が「その荷物、重いやろ。この荷物と換え」と言っていたことです。

それと、気軽に話しかけてくださったこととです。もっと楽しんでいいで、「しんどくなつたらいつてもいいよ」など、その一言一言が僕の緊張をほぐしてくれました。三日間、本当にありがとうございました。

また、お体に気をつけてお仕事がんばってください。

敬具

(22)村田敏郎「主体的な進路選択を促進する進路指導VOL. 4」『研究集録』京都市立永松記念教育センター 1996 p.216

第4章 学習プログラムの有効性

第1節 実証授業を通して明らかになったこと

(1) 生徒の姿から見る学習プログラムの有効性
第3章の実証授業の分析と考察を踏まえて、本項では、ある生徒AさんとBさんのユニットを通じた変容を追うことで学習プログラムの有効性を検証していきたい。

検証に当たっては、第2章で提示した図2-1「ユニットにおける道德的実践力育成の構造」を踏まえて、次の四つの視点に注目したい。

【視点1】事前道德で体験につながるような価値の気付きが促されたか。

【視点2】体験で実感した価値と、事前道德で気付いた価値の対峙があったか。

【視点3】事後道德で、価値の補充・深化・統合が図られ、価値の内面化が図られたか。また、その際に、体験を教材化した資料が有効であったか。

【視点4】深まった価値を日常生活に反映させようとする意欲や態度が培われ「人間としての生き方」の探究につながっているか。

自分が一緒に働いている人だけではなく、そこを訪れる人と触れ合うことがすごく楽しかった。だから、仕事は自分のためにした方がいいと思うから、趣味や特技が生かせる仕事につきたい。」と書いており、自分の将来の仕事をどのような基準で考えるべきかという「生き方」の視点と関連させて価値を捉えていることが読み取れる【視点4】。また、これらの記述内容を事前道徳と比べると、Aさんが勤労に対する意義として捉えていた「やりがい」という価値に、新たに「楽しく働く」という意義が付け加えられていることがわかる【視点3】。

つまり、Aさんは事前道徳で自分が感性的に理解していた勤労に対する価値に気付き、体験を通して実感することで、自己の内面対話が生まれ、価値の自覚を図っていた。さらに事後道徳で、教材化された職場体験のビデオを視聴することや、他の人の意見を聞くことで、価値の補充・深化・統合が図られ、それまで自分が深めてきた価値の知的理解が深まることで、価値の内面化が促されたのである。そして、その価値を自分の日常生活に反映させていこうとする意欲へと発展していた。これは、体験と結びついた道徳の時間での道徳的実践力の育成の構造と合致しており、Aさんにとって、このユニット学習プログラムは有効であったと考えられる。

ユニット「思いやり・感謝」

このユニットでは、Bさんの変容を追っていききたい。まず、事前道徳「とべないホテル」での感想文を紹介する。

私がまわりのホテルだったら、身代わりになるなんていうことをしなと思う。誰かの身代わりになるっていうのは、すごいことだと思ふ。私には絶対にできないし、本当にすごいことだと思ふ。私も人のことを考えられるようになりたいと思つた。

このようにBさんは、資料を通して身代わりになってでも仲間を助けるという行為に、道徳的価値を見出している【視点1】。そして、その価値を自分の生活に反映させようとする意欲も感じられる【視点4】。

この事前道徳での価値の気付きと深まりを受け、職場体験に臨んだBさんは、職場体験で「思いやり・感謝」という価値をさらに深めている。感想文の一部を紹介する。

私は、この体験を通してパンの作り方なども教えてもらったけど、一番学べたものは、人の優しさだと思ふ。教えてくださったのも優しさだし、声をかけてくださったのも優しさだと思ふ。自分が優しくすれば相手もうれしくなるし、相手がうれしくなれば自分もうれしくなるから、優しくするという事は良いことだと思ふ。そして、私はこれからの生活にこのことを役立てていこう

と思ふ。

感想文からも分かるように、Bさんは、職場体験で人の優しさに触れ、それに心を動かされ、さらに価値を深めている【視点2】。

さらに、事後道徳で体験を教材化したビデオを視聴することによって、そのときの価値の深まりを想起することができた【視点3】。Bさんは、体験でのまわりの人からの思いやりのある行為に感謝し【視点3】、礼状の最後を「この体験で学んだことを忘れずに、これからの生活に役立てていけたらいいと思います」という言葉で締めくくっているのである。ユニットを通して深まった価値の自覚を日常生活へ反映させようとする意欲へと発展している【視点4】。

ユニット「思いやり・感謝」における学習プログラムも道徳的実践力の育成へとつながる契機となったと考えられる。

生徒の姿から明らかになったこと

AさんとBさんのユニットを通じた変容が、すべての生徒に当てはまるというわけではない。しかし、実証授業を実施した生徒338人分のワークシートの記述内容や職場体験の感想文などを見ると、1から4までのすべての視点での価値の深まりが読み取れなくても、多くの生徒がどれかの視点、あるいは、複数の視点での価値の深まりがあったことが見受けられた。

つまり、ユニットとして一つのねらいを連続して思考することで価値の自覚が深まり、さらに道徳の時間と体験とを結びつけることで、生徒が価値の深まりを自分の日常生活に反映させようとする意欲や態度がより育成されているのではないかと考えられる。ある生徒は、道徳の時間の感想文に、将来は今習っていることを生かしていきたいとし、そのためにも「いつもやる道徳は大事だなぁって思っています」と書いていることも、ユニットの有効性を示すものではないかと思う。

ただし、このように、生徒の姿をワークシートや感想文から読み取ることににおいては、読み取る側の主観が入ることは否めないのも事実である。そこで、次項では、生徒の自己点検カードの結果を分析することで、道徳的実践力の育成に本プログラムが有効であったかを検証していきたい。

(2) 自己点検カードから見る

学習プログラムの有効性

本項では、第2章でその構造を示した学習プログラムの有効性を実証するための自己点検カードの結果と、そこから明らかになったことについて

述べていく。

自己点検カードの分析方法

【意識】についての設問に対しては「とてもそう思う」を2点、「まあまあそう思う」を1点、「あんまりそう思わない」を-1点、「まったくそう思わない」を-2点とし、すべての生徒が2点のときを100とする指数で表すことにする。また、【実践力】についての設問に対しても「よく実行している」を2点、「ときどき実行している」を1点、「あんまり実行していない」を-1点、「まったく実行していない」を-2点とし、すべての生徒が2点のときを100とする指数で表している。

また、10個の設問については、表4-1で示すように、以後その設問の内容をキーワードで表すことにする。

表4-1 設問内容とキーワード

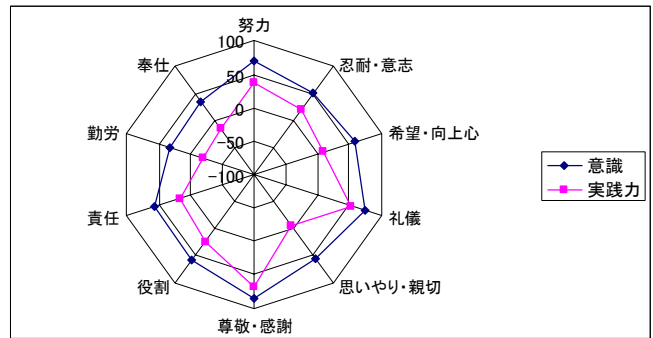
視点	キーワード	設問内容
対・自分（主として自分自身に関すること）	努力	やりとげなければならないことは、努力してやりとげる
	忍耐・意志	物事に対しては、あきらめないでねばり強く取り組む
	希望・向上心	自分が立てた目標に向かって、前向きに取り組む
対・他の人（主として他の人とのかかわりに関すること）	礼儀	時と場所と相手に応じた言葉づかいや態度をとる
	思いやり・親切	困っている人がいたら、進んで手助けする
	尊敬・感謝	お世話になった人に、感謝の気持ちをもつ
対・集団、社会（主として集団や社会とのかかわりに関すること）	役割	集団のルールを守り、自分に与えられた役割をしっかりと果たす
	責任	集団のメンバーと協力して、責任をもって物事に取り組む
	勤労	誰が見ていなくても、家の手伝いやクラスの仕事をやる
	奉仕	人の役に立つために、進んで仕事をやる

以上の分析方法で、事前の自己点検カードを分析した結果が、表4-2と図4-1である。

表4-2 事前の自己点検カードの結果

視点	設問のキーワード	意識	意識の平均	実践力	実践力の平均
対自分	努力	69.0	58.8	36.5	21.4
	忍耐・意志	50.2		19.7	
	希望・向上心	57.3		8.1	
対他人	礼儀	73.3	70.7	52.7	38.3
	思いやり・親切	53.7		-5.6	
	尊敬・感謝	85.2		67.7	
対集団・社会	役割	57.5	45.1	23.2	1.1
	責任	57.0		17.0	
	勤労	31.3		-19.6	
	奉仕	34.7		-16.1	

図4-1 設問ごとの意識と実践力の比較（事前）

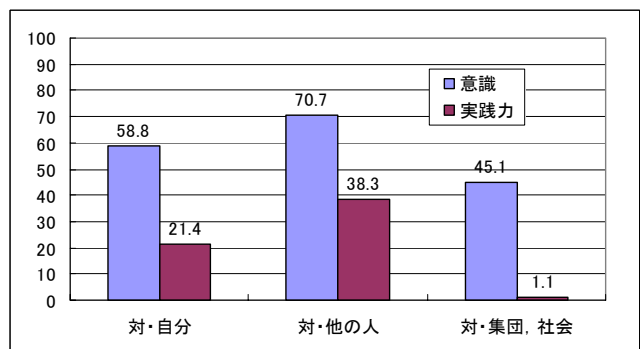


生徒の傾向

この5月27日時点の結果から、まず全体の生徒の傾向をみてみたい。表4-2と図4-1からも明らかなように、どの設問についても実践力は意識よりも低いことが明らかである。このことについては予想していたことだが、道徳的価値についての自覚はあっても、それを日常生活に反映させることが難しいことを表していると考えられる。中学生に限らず、私たち大人を振り返ってみても、分かっているが実践できない場面は多くある。しかし、そのことを否定的に捉えるのではなく、価値についての意識があるけれど実践できていないことを自覚することが、「人間としての生き方」を探究していく上で、重要なことだと捉えることが大切だと思われる。

次に、各設問をそれぞれの視点からみると、図4-2のようになる。

図4-2 視点ごとの意識と実践力の比較（事前）



対・他人の視点が意識・実践力とも高く、対・集団、社会の視点がともに低いことが分かる。これは、発達段階と関係しているのではないかと考えられる。幼少の頃の自己中心的な言動から、他の人の存在を意識し、他の人とのかかわりの中で生活していることに気付き、そのことを意識して行動する力が育ちつつあるのではないだろうか。そして、中学生という時期に自分という存在を対・他人の視野から対・集団、社会という視野で見つめることができるようにな

っていくことの表れではないかと考えられる。

さらに図4 - 2からは、対・集団、社会の視点において、意識と実践力の差が大きいことも読み取れる。これは、集団や社会の中で道徳的な行為を行うことに対して、自分が他者からどうみられているのかということに気にするという思春期の特徴の表れではないかと考えられる。つまり、集団や社会における道徳的価値の大切さは理解しているものの、周囲の目を気にして実践に移せないことがあると考えたのである。このことから、中学生という時期に 対・集団、社会 における道徳的価値の大切さを自覚し、実践力へとつなげていく働きかけが「人間としての生き方」の自覚を深める上で重要であると考えられる。

さらに、視点ごとのそれぞれの設問についてみると、対・自分 の視点では、「希望・向上心」の実践力が低いことが分かる。これは、同じ 対・自分 の設問である「努力」(やらなければならないことは、努力してやりとげる)「忍耐・意志」(物事に対しては、あきらめないでねばり強く取り組む)が、その時々で実践しているという実感をもつことができるのに対し、「希望・向上心」(自分の立てた目標に向かって前向きに取り組む)は、先を見通して常にその価値を意識して実践していくことが求められているため、その成果を実感しにくく、実践力へと反映しにくいのではないかと考えられる。

また、対・他の人 の視点では、「尊敬・感謝」が意識・実践力とも高いのに対して、「思いやり・親切」は意識・実践力ともに低い。これは、「尊敬・感謝」の設問文が「お世話になった人に感謝の気持ちをもつ」という他の人からの行為に対してどう思うかという内容であるのに対して、「思いやり・親切」の設問文は「困っている人がいたら、進んで手助けする」という自分が他の人にする行為であることと関係しているのではないかと考えられる。つまり、他の人からうけた思いやりや親切に対しては、心を動かされ、感謝の気持ちをもつが、その行為をする側とされる側の立場を変えて実践しようとするまで価値が高まっていないことの表れではないだろうか。

また、「礼儀」「尊敬・感謝」の設問については、全体からみても意識・実践力ともに高い。このことは、幼少の頃から家庭生活や就学前教育の中で、「挨拶をしっかりとしなさい」「お礼(ありがとう)をしっかりと言いなさい」という言葉で、重視されてきたことが意識・実践力とも高くなった原因ではないかと思われる。

最後に、対・集団、社会 の視点の設問をみると、「役割」「責任」に比べ、「勤労」「奉仕」が意識・実践力ともに低い。これについては、「勤労」「奉仕」は、おもに 対・社会 の中で培われるものであり、学校生活が生活の主となる生徒にとっては、意図的に社会との関わりを通して「勤労」「奉仕」に関する体験をしなければ、その価値の自覚が深まりにくいのではないかと考えられる。一方、「役割」「責任」は、学校という限られた集団の中でも、その価値を意識し実践する機会が多く、その価値の自覚は深まりやすいと思われる。このことが、「役割」「責任」が、「勤労」「奉仕」に比べて、意識・実践力とも低い原因ではないかと考えた。

事前・事後自己点検カードの比較

11月15日に実施した事後の自己点検カードの結果を表4 - 3にまとめ、図4 - 3と図4 - 4でそれぞれ、意識と実践力の事前と事後の自己点検の結果を比較した。

表4 - 3 事後の自己点検カードの結果

視点	設問のキーワード	意識	意識の平均	実践力	実践力の平均
対 自分	努力	74.3	66.5	34.6	24.5
	忍耐・意志	60.7		24.2	
	希望・向上心	64.4		14.7	
対 他の人	礼儀	79.8	74.7	50.6	34.8
	思いやり・親切	56.5		-12.7	
	尊敬・感謝	87.7		66.4	
対 集団、社 会	役割	61.9	48.7	24.3	1.6
	責任	61.2		23.9	
	勤労	35.3		-19.9	
	奉仕	36.2		-22.0	

図4 - 3を見ると、意識については、すべての設問で事後の方が高くなっている。しかし、実践力については、図4 - 4でわかるように、高くなった設問もあれば、低くなっている設問もあるのが分かる。

事後の自己点検カードにおいて、事前に比べて実践力の面での低下が見受けられた設問は「努力」「礼儀」「思いやり・親切」「尊敬・感謝」「勤労」「奉仕」であり、研究協力校で実証授業として取り組んだ三つのユニットのねらいと共通するものが多い。三つのユニットのねらいは「礼儀」「思いやり・感謝」「勤労」である。

しかし、第3章で明らかにしたように、これらのユニットの実証授業の観察を通したり、授業における発言内容やワークシートの記述内容、感想文などを見たりすると、多くの生徒がこれらの価

図4 - 3 【意識】に対する自己点検の事前と事後の比較

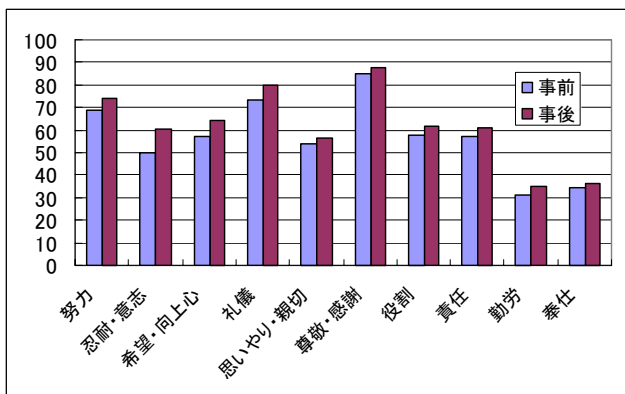
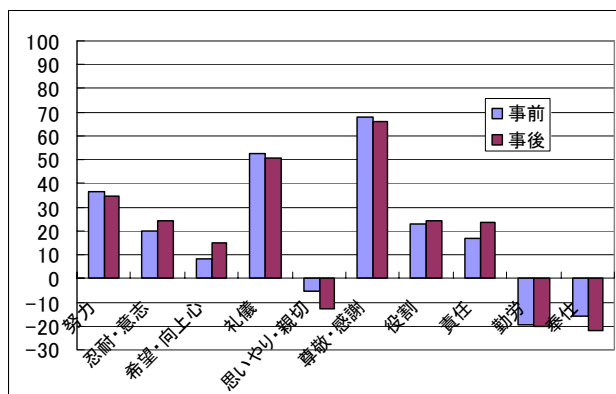


図4 - 4 【実践力】に対する自己点検の事前と事後の比較



値の自覚を深めていることが分かる。

これらのことから次のような推察ができるのではないかと思います。道徳の時間や職場体験によって、そのねらいとしている価値の自覚が深まり、意識の面では事前に比べると高い数字を示すことになった。しかし、意識が高くなったのに伴い、その価値について実践しているかどうかという設問に対して自分を振り返ったとき、評価基準が上がり、事前に比べると数字が低くなったのではないかと思います。

たとえば、「礼儀」という価値について考えてみると、礼儀の大切さやそれがもっている意義をしっかりと理解すればするほど、日常生活においていかに自分が実践できていないかを認識することになる。今まで、自分では礼儀をわきまえて行動していたつもりだったが、実際の体験を通して、あるいは、道徳の時間において価値を深めたことによって、今までの礼儀では自分としては納得できなくなったのではないかと考えられる。

実際に、生徒の職場体験の感想文の中には、改めて礼儀の大切さを感じたと書いている生徒もいれば、今までできていたと思っていたが自分の挨拶は社会では通用しないことがわかったと書いている生徒もいた。あるクラスの職場体験の感想文を調べてみると、25名中、7名もの生徒が感想文

の中で、自分の礼儀に関する反省を述べている。前年度の感想文よりもはるかに多くの生徒が「礼儀」という価値を自覚して、職場体験に臨んでいたことが伺える。この「礼儀」に関する記述を抜き出してみる。

反省する箇所は、もうちょっといろんな人に挨拶がしたかったことです。

反省は、子どもたちのお母さんやお婆ちゃんに会ったときに、挨拶していないときがあった。先生にも挨拶できていないときがあったのが反省点だと思う。

反省するところは、声です。事業所の方が説明してくださっているのに、返事が言えませんでした。それに、基本の挨拶もきちんとできていませんでした。だからこれからは、学校で日頃から挨拶をして、身につけていきたいと思います。

この三日間で反省するところは、挨拶です。もっと、大きな声で挨拶していたら、と思いました。

残念なことは、返事がしっかりできていなかったり、挨拶が進んでできなかったり、大きな声で言えなかったことです。

礼儀もよく学びました。どこの仕事も礼儀が必要だとわかりました。体験で反省すべきところは、ミスをしたときにあやまる声小さかったこと、挨拶が積極的にできなかったことが反省点です。

これらの記述からも、礼儀の必要性・重要性は充分理解していながらも、それが実際には実践できなかったことを後悔している様子が見取れる。

以上のことから、事後の自己点検カードで、事前と比べると意識は高くなったが、実践力の面で、生徒が自分自身を厳しく評価しているという推察はおおむね的を得ているのではないだろうかと思われる。

自己点検カードから明らかになったこと

事前と事後の自己点検カードの分析の結果は、以上の通りである。

これらの分析と考察を踏まえて、本研究の学習プログラムの有効性を検証してみたい。

研究協力校では、一学期の職場訪問と二学期の職場体験を通し、これらの体験と結びついた三つのユニットを展開した。5月の事前と11月の事後の自己点検カードの間には、学校教育活動においても様々な行事がある上、中学二年という年齢を考えると、思春期の大きな変動の時期にあたり、精神的な成長があると考えられる。

したがって、この自己点検カードの結果で学習プログラムの有効性のすべてを検証することは難しいと思われる。しかし、前項の生徒の姿と合わせて考えると、この結果は、少なからず学習プログラムの有効性を実証しているのではないかとと思われる。意識の面ではすべての設問において事前よりも事後の方がその数字が高くなっていることから、生徒の内面において価値の自覚が深まっ

たことは明らかである。また、実践面においては、価値の自覚が日常生活に反映されるまでには個人差があり、生徒の今後の生活の中で、徐々にその結果が表れてくるのではないかと思われる。今現在、実践できていなくても、それぞれの価値についての自覚が深まるのが、これから先「人間としての生き方」を探究していく上での重要な指針となるはずである。

第2節 心に響く道德の時間のあり方

昨年度と今年度の研究はともに体験と道德の時間を結びつけて心に響く道德の時間とし、道德的実践力の育成を図ることをねらいとしてきた。

そして、心に響く道德の時間にするための改善点を「道德の時間そのものの改善」と「道德の時間へのアプローチの改善」の二つの面から捉えた。

ここでは、この改善の視点に立ち本学習プログラムを開発し実践してきた中で今後の課題として考えられることについて整理しておきたい。

教材選択について

本研究では、道德の時間の資料として体験を教材化したものを活用したことに特徴がある。これは、「道德の時間へのアプローチの改善」にかかわり、道德の時間に深めた道德的価値を日常生活に反映させるための有効な教材となると考えて開発したものである。

本学習プログラムの中では、体験のビデオ映像や生徒感想文を教材化したものを資料として活用している。

これらの資料を活用することの成果は、道德の時間のことを自分のこととして考えることができることである。たとえビデオの中に自分が映っていても、体験が映像となり、そこに仲間の姿を見ることは、道德の時間をより身近なものとして感じることができる。今まで、道德の時間を他人事のように捉え、その内容についても、タテマエと考えることの多かった生徒にとっては、自分のことと結びつけて考えることができる有効な資料となったと思われる。

しかし、体験を教材化する場合に留意することもある。それは、教材化するために映像を再構成しても、そのねらいが明確には表れにくい場合があるということである。たとえば、本研究のユニット「思いやり・感謝」での事後道德では、初日と最終日の生徒の様子の変化がわかるように四つの事業所ごとに撮影した映像を再構成した。しかし、ビデオ撮影自体は、ねらいをもって行うもの

の、被写体の生徒がそのねらいどおりの行動をとるとは限らないため、資料としての映像の焦点がぼやけてしまうこともあった。

そこで、体験を教材化した資料を活用する際には、別の資料を活用することも、その道德の時間のねらいを明確にするための有効な手段であったと思われる。特に、ビデオ教材の場合には、視覚や聴覚を通して生徒は感性で価値を受け止めるため、それを言葉を媒介として知的な理解に深めるために、読み物資料や生徒の感想文を併用することは、教材化された体験の効果をより高めたと思われる。また、この感性で理解した価値を知的理解に深める資料として、今年度より全国の小・中学校の全児童・生徒に配布された『心のノート』の活用も可能であると考えられる。『心のノート』では、それぞれの道德的価値が分かりやすく書かれており、感性で受け止めた抽象的な思考を具体化し、知的に理解することにおいて有効な活用が期待できるのではないかと考えている。

体験を教材化することは、労力を要することであるが、道德の時間に深まった道德的価値の自覚を自分の日常生活に結びつける点では、他の教材より力があると思われる。

授業方法と授業形態について

授業方法と形態の工夫は「道德の時間そのものの改善」に関わる工夫である。心に響く道德の時間のためには、道德の時間そのもののことが心に残ることが第一の段階であることは、第1章で述べた。そして、心に残るためには、よりよい教材を選択することはもちろん、その教材を生かす方法と形態を見つけることが必要である。

心に残り心に響いていく過程では、まず価値に自分から気付くこと、そして、その気付いた価値に対して自分の意見を持ち、その意見を他者に伝えたり、他者の意見を聞いたりするような意見交換ができることがその重要な要素ではないかと考える。そのための授業方法と形態を工夫する必要があると思われる。

まず、授業方法について考えたいと思う。生徒は、タテマエの答を期待するような授業に対して反感をもつ。それは、最初から答もそこに至る道筋もわかっていることに対して真剣に考える気にはなれないからである。それよりも、自分で価値観を形成していくことに学習の楽しみを感じる。そのため、一つの価値に対して多様な考え方が可能であり、他の人と意見を交換し合いながらその中で自分の価値観を築いていける学習に積極的に参加しようとするのである。今までの実証授業の

中でも、ランキングやブレインストーミング、フォトランゲージなどの自分の思考を自由に伸ばしていける学習方法に関心を示していた。つまり、今紹介したような生徒参加型の授業方法にせよ、「発問 応答」といった教師主導型の授業方法にせよ、できるだけいろいろな考え方が可能であったり、他の人の考えを知ることができたりする授業方法が望ましいのではないかと思われた。

次に授業形態についてであるが、実証授業などを通して感じたことは、大人が思っている以上に、生徒は自分の意見をしっかりともち、しかもそれを誰かに伝えたいと思っているということである。また、他の人がどんな考えをもっているのかも知りたいとも思っている。

しかし、周囲の目を気にする時期である中学生にとっては、多くの人の前で自分の意見を言うことに対して抵抗を感じるようである。しかし、少人数の話し合いならば、活発に意見交換ができることも多々ある。実際に班単位でランキングを考えたときには、お互いに活発な意見交換をしていた。つまり、生徒は自分の意見がためらいなく発表できる環境が整いさえすれば、意見を誰かに伝えたいと思っていると感じられた。この点から考えると、自分の意見を言いやすい少人数の集団のほうが、価値の自覚が深まるのではないかと思われた。

道徳の年間計画とユニットについて

体験と結びついた道徳の時間の学習プログラムを開発してきたが、今までからも学校現場においては、生徒の体験と結びついた道徳の時間を展開してきている。たとえば、合唱コンクールや体育大会などの行事に合わせて、他の人と協力してものごとをやりとげることや努力することの大切さを考える道徳の時間を展開したり、生徒の実態に合わせて、仲間を思いやることや、自分の役割や責任を果たすことの大切さを考える道徳の時間なども実践してきたりしている。

しかし、これらの実践は単発的なものが多く、計画的に取り組まれることが少なかったように思われる。どんな生徒に育ててほしいのか、どんな生徒に育てたいのかということを見通しをもって考えることは重要なことである。そのとき、数多くの体験の中からねらいとする価値を深めるのに適した体験を選択することと、そして、その体験と結びついた道徳の時間をユニットとして年度当初に年間計画に配しておくことが有効な道徳的実践力の育成につながるのではないかと思われる。

おわりに

道徳の時間が心に響く時間となるために、様々な工夫を試みてきた。しかし、これらの工夫が効果を発揮するためには、道徳の時間に忘れてはならない大切な要素があることを最後に述べておきたい。

一つは、道徳の時間の指導者の立場である。指導者は価値を教えるのではなく、生徒と共に悩み考えながら、生徒が価値に気付いていくことを支援する立場でなくてはならないということである。指導者が価値を教えるという立場に立つとき、生徒はそれを価値の押し付けと捉えるのである。そして、押し付けられた価値からは思考が広がったり深まったりすることは期待できず、もちろん、価値の内面化も行われぬ。これでは心に響く道徳の時間となることはなく、もちろん価値が日常生活に反映されることもないのである。それに対して、自分自身で気付いた価値は自己の内面との対話が可能であり、その対話を通して生徒は新たな価値観を形成していくのである。そのような内面で深く自覚した価値は自分との関わりで捉えることができるために、日常生活への反映が促されるのである。道徳的実践力の育成をめざし、指導者は生徒に価値を教えるのではなく、気付かせるという立場を忘れないでいたい。

そして、もう一つが学級の雰囲気である。道徳の時間に限ったことではないが、仲間の意見を嘲笑の対象にするような雰囲気は生徒の思考を滞らせる。自分の意見を何のためらいもなく他者に伝えられる雰囲気、仲間の意見を受け入れようとする雰囲気、そういう人間関係が学級になれば、道徳の学習は成立しない。周りの目を気にして、自分の本音を語らず、あたりさわりのないことを言っておこうとする雰囲気の中では、価値の深まりは期待できるわけがない。

研究協力校では、指導者の先生方が生徒と同じ目線で学習を進められ、生徒は、その道徳の時間に自分の思いを自由に発表できることや、他の仲間が何を考えているのか知ること喜びや楽しみを感じていた。

このような基盤があったからこそ、実証授業を通して学習プログラムの検証ができたと感謝している。この場を借りて、研究協力校の藤森中学校第二学年の先生方の日々の取組の素晴らしさと、それに応えていた生徒の皆さんに心から感謝の意を表したい。